

777  
特220  
188

THE SECRET OF THE FAITH LI

By Andrew Murray, D. D.

# 義奥の活生仰信

著—ア—マ—ールドンア

譯者書聖田原京東

行刊社粒一



# 始



272

特

THE SECRET OF THE FAITH LI

188

By Andrew Murray, D. D.

# 義奥の活生仰信

著—レーマ・ールドンア

譯塾書聖田原京東



行刊社粒一

特220  
188

THE SECRET OF  
THE FAITH LIFE  
By  
Andrew Murray, D. D.

信仰生活の奥義

アンドルー・マレー著  
東京原田聖書塾譯

一粒社刊行



祈 禱

『神様、私に人類が未だ聞いたことのない力ある言をお與へ下さい。』

炎のやうに全世界をこびまわつて、眠りこけてをる魂を目覚めさせ得る力ある言をお與へ下さい。

古い言は既に久しく旗の上に掲げられ、歌にうたはれて古びてしまつて居ります。

愛は不純になり、信仰は光を失ひ、預言者の唇は黙して居ります。

願くは信仰と愛とが再び新しく生れ出づるまで、全世界に向つて叫ぶことの出来る、

何か新しい振ひたゝせるやうな偉大な言を、聖國の聖歌隊から降して下さい。』

私はかく祈つてケルビムの住む嚴かな、薄暗い沈黙のうちに待つてゐたときに、一

つの低い深い聲が、かくいふのを感じた。

『古い言は今も尙その力を持つて居る。やはりその古い言を叫びなさい。』

叫びなさい、叫びなさい。人間の心はそれに答へるであらう。  
 上なる天に於ても「信仰」と「愛」といふ言よりも、より力ある言は無いのだ」と。

### 内容の總括

- 一、我等は聖靈の力によつて、この世の生活をしてゐる間に、キリストの像に變らせられること……………一五
- 二、全能の神は我等の信仰を強くして、我等の衷に彼の凡ての目的を成就したまふこと……………一八
- 三、神は我等が全心・全靈をもつて神を愛し得るやうに心を潔めて下さること……………二一
- 四、神は終日我等をして彼の光のうちに歩ませ、彼の聖名を喜ぶことを得しめたまふこと……………二四
- 五、神の我等に對したまふ御思ひは、この世を離れて清く高く、彼の全能の力によつて我等のうちに成就すること……………二七

- 六、神は我等の心に彼の靈を與へて、我等が彼の律法を喜び、決して彼から離れないやうにならしめたまふこと……………三〇
- 七、神が我等の心を潔め、彼の大神なる力によつて彼等をして彼の律法に歩ましめたまふこと……………三三
- 八、神は己の力をもつてその約束を成就せんために祈禱を待ちたまふこと……………三六
- 九、神の御約束を眞實なもの、また我等の生活に効果あるものたらしめるために、キリスト御自身が神に對する我等の保證人となりたまふこと……………三八
- 十、信仰の服従にとつては不可能なことの無いこと……………四一
- 十一、眞に力ある神としてキリストを信じ得ること……………四四
- 十二、父がキリストに住みたまひし如く、如何にしてキリストが我等のうちに生きてたまふか……………四七
- 十三、如何にしてキリストの愛と、彼に服従することとが、我等のうちに住

- みたまふ父と子によつて合致せしめらるべきか……………五〇
- 十四、聖靈の賜物によつて、我等は榮化されたまうたキリストと、絶えず偕に在り得ること……………五三
- 十五、キリストが地上に在りて父に生きたまうたやうに、我等もキリストに生きることが出来る……………五六
- 十六、絶えずキリストのうちに住み、恰も枝が葡萄の樹に連つて居るやうに、多くの果を結ぶことが出来るその特權について……………六〇
- 十七、キリストの御名によりて祈る凡ての祈禱の原則は『汝らの求むる所を我これをなさん』といふ處にあること……………六三
- 十八、我等に對するキリストによる神の愛と、同胞に對する我等の愛とが世界を征服する力であるべきこと……………六六
- 十九、義とせらるゝこと、キリストにある義……………七〇

二十、再生、キリストにある生命……………七三

廿一、十字架につけられたまひしキリストが我等のうちに生きたまふ、その  
いひがたき祝福について……………七六

廿二、我等を愛し、我等のために己れを與へたまひしキリストを信する信仰  
の偉大なる力……………七九

廿三、キリストのために凡てのものを損となす報ひについて……………八二

廿四、『神汝を全く潔め給ふ』といふ祝福せられたる保證……………八五

廿五、我等に對する極めて大なる神の能力を如何にして知るか……………八九

廿六、福音即ち内在のキリストの神約……………九二

廿七、『神は凡てのよき業につきて汝らを全うし給はん』……………九五

廿八、再説、『もろくの恩恵の神、汝を全うし給ふ』……………九八

廿九、罪なきキリストのうちに居ること、罪を犯さしめざる能力……………一〇一

三十、世に勝つ信仰……………一〇四

卅一、我等の信仰の作者及び完成者たるイエス……………一〇七

附録、勝利の生涯……………一一一

恵み深き父なる神様、あなたが私共のためにキリスト・イエスに在つて備へて下さいましたこの驚くべき救のために、私共はどうかあなたを讃め稱へたらよろしいでせうか？

私共は、その救を理解すること淺く、それを信ずること薄く、全くその力に身を任せてをらす、又その救の美しさを世に示すことの少い事を、謙遜に懺悔いたします。

私共はキリスト・イエスに在る豊かな生活の幻を、凡ての聖徒にお與へ下さるやうに最も熱心に祈ります。そしてその幻によつてキリストが彼等に對し、如何にあれかしと志し給うたかを充分知るために、彼等の心が深い絶えざる憧に動かされますやうに。世界を祝福すべき筈のあなたの教會が全く無力であるのは、我等の心の中にキリストと聖靈とがあなたのお望みになるやうに宿つてゐないといふこの一事によることを深く彼等が感じますやうに。

そして何よりも願ひますことは、單純に全心をもつてイエス・キリストを信ずること



この必要とその力と恵みとを深く認め、豊かな愛をもつて絶えず借にゐて下さるキリストを受け入れる心の準備が出来て、彼の主權に全然お従ひ申すことが出来ませうやうに。

父様、どうぞイエスの聖名によりて私共の祈りをお聞き下さいまして、この小さい本をよむ人達に、凡ての御約束を成就したまふあなたの力を認めしめ、あなたの御眞實に對する謙遜な、幼兒のやうな信頼をお與へ下さいまして、あなたの御榮光となりませうやうに。

願くは、凡ての榮光が永遠にあなたに歸しますやうに。アーメン

## 信仰生活の奥義

## 第一日神の像

「神いひ給ひけるは、我儕に象りて我儕の像の如くに人を造り」(創世記第一章二十六節)

こゝに人間についての最初の思想があります。即ちその起源と運命とは全く神よりのものであるとの事であります。神ではないが、その聖なる榮光に於ては全く御自身と同じである處の一つの生物を造らうといふ、素晴らしい業を、神はお始めになりました。人間といふものは、全然神によりたのんで生くべきものであり、神のうちにある聖なるものと、恵みとを直接にまた絶えず神御自身から頂くべきものでありました。そして神の榮光、神の聖、神の愛が、人間のうちに宿り、彼を通して輝き出づべき筈でありました。

罪がその怖るべき業をなし遂げて、神の像を汚したときに、神の目的が成就されるべき婦の裔について、パラダイスに於て約束が與へられました。即ち「神の榮光のか

どやき、神の本質の像なる神の子』（ヘブル書一章三節）が人の子となり、神の像が人間の形に於て啓示せられ、かくて神の御計畫がその人によつて實現するといふのである。新約聖書はこの創造の思想を取上げて、『御子の像に象らせんと預じめ定め』（ロマ書八章二九節）られた人々や、『人を造りし神の像に似せて造りかへられた新しき人』（コロサイ書三章十節）について語り、『主の現れたまふ時、われら之に肖んことを知る。我らその眞の状を見るべければなり』（ヨハネ第壹書三章二節）との約束を與へて居ります。

そしてこの永遠の御目的とその永遠の實現との中間にあつて、私共はこの地上の生活に關して驚くべき約束を持つて居ります。『我等はみな……主の榮光を見、榮光より榮光にすすみ、主たる御靈によりて主と同じ像に化するなり』（コリント後書三章十八節）。

パウロが直ぐその前に、『更に優れる光榮に比ぶれば、況て靈の職は光榮なからんや』

といつてゐるのはこの事でありませぬ。キリストを榮光を受け給ひし御方として崇める人々にとつて、この聖句の約束は日常生活に實現し得る、慥かな經驗となるといふことを信じやうではありませんか。聖靈が私共を日毎に榮光より榮光に進んで、同じ像に化して下さることを信じて、キリストにある神の像の榮光に心を注いで行かうではありませんか。おゝ私の魂よ、この約束がお前の信仰生活に實現せらるゝことを固く固く信じなさい。己が像に似せて人を造り給ひし全能の神は、いま聖靈の力によりてお前をキリスト・イエスの像に化そうといふその目的を果さんことを求めておいでになる。

『汝らキリスト・イエスの心を心とせよ』（ピリピ書二章五節）。『われ汝らに模範を示せり、わが爲しごとく、汝らも爲さんためなり』（ヨハネ傳十三章十五節）。  
『主よ、われらの信仰を増したまへ』（ルカ傳十七章五節）。

## 第二日 信仰の服従

「エホバ、アブラハムに顯れて之に言たまひけるは、我は全能の神なり、汝我前に行みて完全かれよ。我……大に汝の子孫を増ん」(創世記第十七章一、二節)

神は單に信仰を要求し、また信仰に應じて報ひをなしたまふ許りでなく、恵み深い訓練を與へて信仰を増さしめ給ふ、といふことを私共はアブラハムの場合で知ることが出来ます。神が始めアブラハムをお召しになつたときに、直ぐに「天下の諸の宗族汝によりて福祿を獲と」(創世記十二章三節) いふ偉大な約束をお與へになりました。アブラハムが示された地に着いたときに、神はその地を彼に與へるといふ約束(創世記十二章七節)をなさいました。それからアブラハムが王達との戦から歸つて來たとき、神はまた現れてその約束を新になさいました(創世記十五章五節)。聖書の言によ

ると、イサクの生れる前に、神はアブラハムの信仰を強めやうとなさいました(創世記十七章)。そうして尙もう一度マムレの平野で、「エホバ豈なし難き事あらんや」(創世記十八章十四節)と仰せられました。一步一步神はアブラハムを導いて遂にその信仰を完成し、イサクを捧げる程の全き服従をなし得る者になさいました。「信仰によりてアブラハムは神の言に従ひていで行けり」(ヘブル書十一章八節)とあるやうに、信仰によつてそれから四十年の後には、何の約束もなしに實際凡ての約束と矛盾してゐるにも拘らず、どこまでも神の御意志に従ふことが出来ました。

父なる神は、アブラハムの子であり神の子である貴方がたの信仰に對して大なる要求をしておいでになります。もし貴方がアブラハムの足跡に従ふといふのなら、貴方もまた神の言以外の何者にも頼らないで、神のために撰び別たれた靈的約束の地に住むために、凡てのものを捨てねばなりません。そのためには、貴方の衷に働いて居られる神が、その望み給ふまゝに凡てのことをなし得たまふ全能者でおいでになるとい

ふことを、深くハッキリと知る必要があります。信仰生活をするといふ事が、小さな容易いことだと考へてはなりません。それは終日神の前に生きざることを求める生活でなくてはなりません。神が貴方にも亦「我は全能の神なり、汝我前に行みて完全かれよ、我……大に汝の子孫を増ん」と仰しやるまで謙つて神の前に跪きなさい。アブラハムが之を聞いたとき、彼は「俯伏」しました。そして「神また彼につけて言ひ」たまひました。これが神が約束なさつた凡てのことに對して、神を信頼するその信頼の力が生れて来る、秘れたる源泉であります。

この小冊子に於て、私共は信仰の力がどんなものかといふことと、「神の全能の權威の活動によりて信する我らに對する能力の極めて大なる」(エペソ書一章十九節)によりて、神が何を爲さんと望んでゐるたまふかといふ事とを學びたく思つて居ります。そうしてのみ私共は神に對する眞の献物としての生活、即ちどこ／＼迄も服従して行く信仰の生活をするために、召される時にアブラハムのやうに出て行くことが出來ます。

アブラハムの足跡に従つてお歩きなさい。神の言の證を深くあなたの心におどめなさい。——「信仰により強くなりて神に榮光を歸し、その約し給へることを成し得給ふと確信せり」(ロマ書四章二十、廿一節)とあります。

### 第三日 神の愛

「汝心を盡し精神を盡し力を盡して汝の神エホバを愛すべし」(申命記第六章五節)

全き心をもつて神を信ずるとはどういふ事か、といふことを神はアブラハムにお教へになりました。彼は信仰によりて強くなり、神に榮光を歸しました。モーセはイスラエルに、第一にして大なる誠命は心を盡して神を愛することだと教へました。これは第一の誠命であつて、他の誠命が自然にそれから流れ出づべき源泉であります。これは愛の深い創造者としての神と、その愛の對象として御自分の像に似せてお造りに

なつた人間との関係の上に基礎をもつて居るもので、本来それ以外の何ものでもあり得ない性質のものであります。人間は心を盡し力を盡して神を愛するこの一つのこと以外の何ものうちにも、その生命、その幸運、その祝福を見出さない筈のものであります。モーセは「エホバたゞ汝の先祖等を悦びて之を愛し」(申命記十章十五節)といつて居ります。こういふ神こそ無限に愛せらるゝ價値ある神でありました。私共の宗教、私共の神に對する信仰および服従、即ち私共の全生涯は心を盡し力を盡して神を愛すべしといふこの一つの思想によつて鼓吹せられるのであります。日毎にこの誠命を生活に顯すことが、神の子の第一の義務であります。

如何にイスラエルの人々がこの誠命に従ひ得なかつたかといふことは私共のよく知るどころであります。併しモーセはその死ぬ前に、その罪のために神がイスラエルに降し給ふべき審判について語つた後、「汝の神エホバ汝の心に割禮を施し給ふべし」(申命記三十章六節)といふ約束を告げしらせることが出来ました。これは即ち手を

もてせざるキリストの割禮(コロサイ書二章十一節)で、いひかへると「心を盡し精神をつくして汝の神エホバを愛する」(申命記三十章六節)ことであります。

この恵まれた約束が、新しき契約の第一の徴證でありました。その新しき契約のうち、エレミヤは人をして「神から離れずして神の道を歩ましめるために、聖靈によつて心にかきつけられる律法について預言して居ります。併しこのことを理解してゐる基督者が何と少いことぞせう。多くの基督者は、それは不可能だといふ考に満足して平氣で居ります。

こゝで二重の教訓を學びませう。この力を盡して神を愛する完全な心は、神の要求し給ふところであり、神は無限にそれに價し給ひます。それは又——聖名に榮あれ！——神御自身が私共のうちに働き且つ與へ給ふものであります。私共が全心を盡して神を愛するやうにならせて下さるといふ、この約束の成就を魂の奥底から信仰をもつて待ち望みませう。

『我らに賜ひたる聖靈によりて神の愛、われらの心に注げばなり』(ロマ書五章五節)。これが私共が心を盡して神を愛する恩恵を最も確かな恵まれたものに致します。

### 第四日 喜びの音

「よろこびの音をしる民はさいはひなり。エホバよ、かれらはみかほの光のなかをあゆめり。かれらは名によりて終日よろこび」(詩篇第八十九篇十五、十六節)

『大なる喜びの喜ばしき音信』とは天使が福音を呼んだ言でありました。それがこゝに『よろこびの音』といはれて居るものであります。この祝福は神の光のなかを歩み、終日その御名によりて喜ぶ神の民に與へられます。妨げられない交りご、いつまでも盡きない喜びとは彼等の分であります。舊約時代に於てすらも聖徒達は時々こゝにいふ経験を致しました。併しそれは續きませんでした。舊約はそれを保證する事は出

来ません。たゞ新約のみがそれを保證しそれを與へます。

秩序あるよい家庭では、父は子供達を喜び子供達は父が居つてくれる事を喜びます。地上の幸福な家庭のこの特長は、天の父が彼の民に約束し且つ實現することを喜び給ふところのものであります。聖顔の光の中を歩み御名によりて終日喜ぶこの事は、既に約束せられ、キリストに於て可能なものとされました。即ち聖靈によつて心が神の愛に満されるのであります。これは心を盡し力を盡して眞に神を愛したいと求めて居る凡ての人々が頂くことの出来るものであります。

併しそんなことは不可能だと簡單に考へて、終日神の現前を喜ぶ生活に對する憧れを希望と共に捨て、了つてゐる神の子供たちが實に澤山あります。併し乍らキリストは『我これらの事を語りたるは、我が喜びの汝らに在り、かつ汝らの喜びの満されん爲なり』(ヨハネ傳十五章十一節)。「我ふたゞ汝らを見ん、その時なんぢらの心喜ぶべし、その喜びを奪ふ者なし」(ヨハネ傳十六章廿二節)と、こんなにハッキリとそれ

を約束しておいでになります。

父なる神がその子供たちの全き信頼と愛を得たいと熱望しておいでになる事と、子供たちにとつてはその幸福と力とのために、一日中刻々に父が現在し給ふことが必要だといふ事を私共は考へませう。また聖霊によつて、この生命を私共の中に保つて下さるキリストの力に就いて考へませう。そうして私共は喜びの音を知つてゐる人々の祝福以下の何ものによつても満足しないやうに致しませう。「かれらはみかほの光のなかをあゆめり。かれらは名によりて終日よろこぶ。そはかれらの力の榮光はなんぢなり」。(詩篇八十九篇十五—十七節)。

私共に對する神の御心に深く入つて行かうとすればする程、その子が聖顔の光の中を歩み、終日御名によりてよろこぶこと以下の何ものを以つてしても、父が御満足なさる筈がないといふ信仰がもつと強くなりませう。また父が私共のために考へてゐて下さる事が、キリストと聖霊によつて私共のうちになされるといふ確信が一層強くな

るでありませう。私共は終日、終日といふこの語をしつかりと握らうではありませんか。

### 第五日 神の思想

「天の地よりたかきがごとく、わが道はなんぢらの道よりも高く、わが思はなんぢらの思よりもたかし」(イザヤ書第五十五章九節)

神が私共に何か爲さんとして、その約束を與へ給ふ場合、神は天の地よりも高きが如く、彼の思想が私共の思想よりも高く——私共の靈的理解力を全然越えて——あることを私共に思ひ出させ給ひます。

私共が神の像に似せて作られてゐることや、恵みによつて實際その像に再び造りかへられることや、また私共がキリストに在る神の榮光を見入る時に、その同じ像に聖



靈によつて私共もかへられるのだと神が語り給ふとき、これはほんとうに天よりも高き思想であります。神がアブラハムとその裔および彼を通して、地上の凡ての諸族のうちになさんとしておいでになつた、凡ての力ある業についてアブラハムに語り給ふとき、これまた天よりも高い思想であつて、人間の頭脳はこれを受入れることが出来ませんでした。私共が心を盡して神を愛するやうにと私共を召し、かつ力を盡して彼を愛することが出来るやうに私共の心を新にして下さることを約束し給ふとき、これまた諸天の天より高い思想であります。そしてこの地上にあつて聖顔の光の中を歩み終日御名によりて喜ぶ生涯に、父なる神が私共をお召しになるとき、私共は神の深い愛の御心の底から出てくる賜を頂くのであります。

私共のうちに宿るこれらの思想に對して私共が親しみを感ずるやうにさせるどころの生命と光とを心に與へて下さるやうに、聖靈によつて神を待望むには、如何に深い敬虔と謙遜と忍耐とが私共にふさはしいことでせう。もし私共が眞に神の心の中に這

入つて行き、彼の思想を私共のうちに住はせやうとするならば、どんなにか神との日毎の柔しい親しい交りが要ることでせう。また神がこれらの思想の美しさと榮光とを啓示し給ふばかりでなく、その聖なる現實と祝福とが私共の最も深いところを眞に充すほどに力強く私共のうちに實際働き給ふといふことを信ずるには、如何に深い信仰を要するものでせう。

パウロが引用してゐるイザヤの言を一寸考へて御覽なさい（コリント前書二章九、十節）。「神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり」されど我らには神これを御靈によりて顯し給へり。キリストが弟子達に天の王座から聖靈を降して彼等と共に居らしめると約束なさいましたとき、彼は聖靈が彼に榮光あらしめ、天の光と生命とを私共に充し給ふと仰せられました。それが神と、その天よりも高き目的とをして、彼等のしつかりとした體驗とならしめるのであります。お、私の魂よ、日毎に聖靈がその聖なる力と榮光

に充ちた神の思想でお前を充して下さる事が實現するやうに求めなさい。

## 第六日 エレミヤ第三十一章に於ける

### 新しき契約

エホバいひたまふ。みよ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日きたらん。  
わが律法を彼らの衷におき、その心の上に録さん（エレミヤ記第三十一章卅一、卅三節）

神がシナイ山でイスラエルに最初の契約をなさいましたとき、神は「汝等もし善く我が言を聴き、わが契約を守らば、汝等は諸の民にまさりてわが寶となるべし」（出埃及記十九章五節）と仰せ給ひました。併し悲しいことにイスラエルは之に服従する力を持ちませんでした。彼等は本質的に肉であり罪でありました。この契約には彼等を従順ならしめる恵の準備がありませんでした。律法はたゞ彼等にその罪を示す役目

をしただけでありました。

今日の聖句には神が新しい契約を立て給ふ約束が記されてあります。そしてそれは人々をして服従の生活をなさしめるといふ準備があります。即ちこの新しい契約では律法は人々の衷に置かれ、その心の上に録されます。「墨にあらで活ける神の御靈にて録され」（コリント後書三章三節）ますから、その人々はダビデと共に「わが神よ、われは聖意にしたがふことを樂む、汝の法はわが心のうちにあり」（詩篇四十篇八節）といふ事が出来るやうになるのであります。律法とそれを喜ぶ事が、聖靈によつて力強く人々の内的生活となつて参ります。いひかへると、エレミヤ記第三十二章二十七—四十節にある様に神は「我に爲す能はざるところあらんや」といはれた後「われ彼らを棄ずして恩を施すべし」といふ永遠の契約をかれらにたて、我を畏るゝの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん」と仰せられて居ります。舊い契約と、それを忠實に守りつゞけさせる事の出来ないその弱さに比べると、この契約は神の言を信

じてその約束が保証するものを充分に求めてゐる人の記號として、絶えずそして全き心をもつてそれに従はしめる事を保証致します。この新しい契約に於ては、この約束を信する凡ての人の心に神の全能の力が示されるといふことをお覚えなさい。『彼等を我より離れざらしめん』、『我に語られたる如くなるべし』。神の前に靜に跪いて、彼の宣ふところをお信じなさい。神から私共を離れさせないやうにするこの神の力を私共が経験する度合は、常に『なんぢらの信仰のごとく汝らに成れ』(マタイ傳九章二十九節)との法則に比例いたします。

この舊い契約と新しい契約との對照を常にハッキリわきまへることに極力努めねばなりません。舊い契約にも驚くほど裕かな恵がありました。併し絶えず従順な信仰に生かされて行くには、それでは不十分でありまして、これは新しき契約の明確にした約束に待たねばなりません。それは新しく生れ變つた心の果と靈魂を導いて私共を『深くして責むべき所』(テサロニケ前書三章十三節)なきやう守りつゞけるために、

裕かなる恵みを啓示する聖靈の力であります。

### 第七日 エゼキエル書に於ける新しき契約

『清き水を汝等に灑ぎて汝等を清くならしめ、汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝等を清くむべし。……吾靈を汝らの衷に置き汝らをして我が法度に歩ましめ、吾律を守りて之を行はしむべし』(エゼキエル書第三十六章廿五―廿七節)

これはエレミヤにあるのと同じ約束であります。即ち罪から心を清め、神の律法に歩み且つその審判を守る事を得させるために、新しき心に聖靈を賜ふといふ約束であります。神がエレミヤに『わが律法をかれらの衷におき、我を畏るゝの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん』(エレミヤ記三十一章三十三節。三十二章四十節)といはれましたやうに、こゝにもまた『汝らをして我が法度に歩ましめ、吾律を守りて

之を行はしむべし』と仰せられて居ります。神の律法を守りつゞけさせる力のない舊い契約に比べて、この新しい契約の大なる特長は、人々を神の律法に歩ましめ且つ之を守りつゞけることを得させる神の力にあります。

『罪の増すところには恩恵も彌増』して、全心をもつて歸依服従せしめます。今日何故このことが餘り経験されないのでせうか。その答は至つて簡單であります。即ちこの約束が信せられず、説かれず、その成就が期待されて居ないからであります。併しロマ書八章一―四節のやうなところにはこの事が實にハッキリ示されて居ります。それによると、『我を…罪の法の下に虜とする』力に悩んでゐた人が、『今やキリスト・イエスに在る』こと、『キリスト・イエスにある生命の御靈の法は、なんぢを罪と死との法より解放』、『御靈に従つて歩む人は、律法の要求に完全に應ずることが出来るやうになつた事を神に感謝して居ります。』

繰返していひます。なにゆゑ今日こういふ證しをすることの出来る人がこんなに少いのでせうか。そしてそうなるには一體どうすればよいのでせうか。それにはたゞ一つの事が必要であります。即ち約束なされた事をその驚くべき力によつてなし遂げたまふ全能の神を信することでありませう。『我エホバ之言ふ之を爲ん』(エゼキエル書三十六章三十六節)。お、私共もこの約束が實現することを信じ初めやうではありませうか。『汝等の諸の汚穢を除きて汝等を清むべし、汝らをして我が法度に歩ましめ吾律を守りて之を行はしむべし』。神がこゝに約束なされた凡てのこと、神がそれをなし給ふであらうといふことを信じやうではありませんか。凡ての思考力を遙にこえて、神は私共の信仰に信頼してこの偉大な輝かしい約束をなさいました！そしてこの約束は私共がそれを信するとき、その信仰を働かせます。即ち『なんぢらの信仰のことく汝らになるべし』であります。今日といふ今日、私共もそれを實驗しようではありませんか。

第八日 新しき契約と祈禱

「汝我によび求めよ、われ汝に應へん、また汝が知らざる大なる事と秘密たる事を汝に示さん」(エレミヤ記第三十三章三節)

「我エホバこれを言ふ之を爲ん。イスラエルの家我が是を彼らのために爲んことをまた我に求むべきなり」(エゼキエル書第卅六章三十六、三十七節)

新しき契約のこの大なる約束は祈禱によつて成就いたします。エレミヤの祈に應じて神は「我を畏るゝの畏をかれらの心において我を離れざらしめん」と仰せられました。またエゼキエルに對して「汝らをして我が法度に歩ましめ、我律を守りて行はしむべし」と仰せられました。私共にとつては、私共の不信仰のためと、神の言の意味を人間的な考や經驗によつて判斷いたしますために、これらの約束が眞に成就するといふことは期待出来ません。私共は神がその約束を文字通り實現なさるおつもりだと

は信じて居りません。私共はその約束を實際私共に經驗させやうとして待つておいでになる神の大能の力を信する信仰を持つて居らないのであります。

そして神は私共にそうした信仰がないなら、ほんの僅かな一部分だけしか經驗出来ないと仰せられて居ります。神は恵み深くもさういふ信仰を見出し得る道を指摘してゐて下さいます。それは篤い祈禱の道であります。「汝我によび求めよ、われ汝に應へん、また汝が知らざる大なる事と秘密たる事を汝に示さん」、「イスラエルの家、我が是を彼らのために爲んことをまた我に求むべきなり」。男も女も一人一人がこの約束の成就を祈り願つて眞心から神に歸るとき、神はこれを成就なさいます。神をしつかりととらへ、その全能の御働きに全く服従する程に信仰が強められますのは、熱心な撓まない祈禱によつてとあります。かくして一人一人が神が如何なることをなし給うたか、又なし給ふかといふことを證し得るやうになつて、信者はお互に助け合ひ、生ける神の教會として役立つことが出来るやうになります。また神の約束が出来るだ

け完全に成就することを祈禱し、且つ確くそれを期待することによつて、亡びつゝある人々に、全き救を施し給ふキリストを説くべき大なる事業を新に委ねられたものとして役立つことが出来ます。

教會の現狀、牧師や會員の狀態、また私共自身の狀態が絶えざる祈禱を要求して居ります。聖靈の力の必要が深く感ぜられるやうに、また強い信仰が多くの人々の心に起つて、神の力ある御業を求め且つ期待するやうになる事を、熱心にたゆまず祈らねばなりません。「我エホバ之をいふ、之をなすべし」。

「主よ、われ信ず、信仰なき我を助け給へ」。

### 第九日 ヘブル書に於ける新契約

「我もその不義を悔み、この後また其の罪を思出でざるべし」(ヘブル書第八章十二節)

ヘブル書に於ては、キリストの事を「更にまされる約束に基きて立てられし勝れる契約の仲保」(八章六節)と申して居ります。キリストに於て契約の二つの部分が完全に成就されて居ります。先づ第一キリストは罪を贖ふために來り給ひました。それによつて人間に對する罪の力が碎かれて、神の恵の御座に憚らずして近づき得ることが保證せられました。第二にそれと共に、より以上の祝福即ち新しい心が出て參りました。新しい心とは罪の力から解放せられ、神の聖靈によつて神の律法を喜ぶ悦びと、それに服従する力を持つた心であります。

契約のこの多方面は決して別々に引き離してはなりません。併し悲しい事に多くの人々は罪の赦しについてはキリストを信じ乍ら、この約束の成就を求めることを少しも考へないのであります。約束の成就とは、聖靈によつて罪から清められた新しい心のことで、神の律法を愛し喜び、これに従ふ能力を持ち、神の民となり、キリストを己の神として知る新契約の全き祝福に與ることでありませぬ。

イエス・キリストはその血の能力による罪の赦しと、彼の御霊の力によつてその心に録された律法をもつた「新しき契約の仲保者」であり給ひます。おゝ罪の完全な赦しがたいかであると同じ程のたしかさで、約束の完全な成就 即ち「我を畏るゝの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん」「汝らをして我が法度に歩ましめ、我律を守りて行はしむ」といふこの事もまた期待することの出来ることだといふ事が分り度いものであります。

併し神がアブラハムに仰せられた「我は全能の神なり……エホバに豈爲し難き事あらんや」との聖言を記憶なさい。神はこの言をエレミヤにもまた新しき契約に關して仰せられました。それには神に全く捧げ盡した生活に對する強い、心の底からの欲求がなければなりません。といふのは、私共の先入主となつてゐる凡ての考を捨て去つて、神の大能の力を信する信仰に立つことを意味します。それはまた新しき契約の仲保者としてイエス・キリストに降伏し、キリストと同じ所によるこんで身を置く事、

即ち世と罪と自我とを十字架に釘けることを意味し、尙それはどんな價を拂つてもキリストに從つて行く心構へを意味します。一言でいへば、キリストを神とし主として單純に心の底から受入れ、心も生活も凡てを彼に捧げることが意味します。神は之を言ひ、且つ爲し給ひます。「我エホバ之をいふ、これをなさん」。

### 第十日 信仰の試練

「時にナーマンの僕等近よりて之にいひけるは、我父よ預言者なんぢに大なる事をなせと命ずるとも汝はそれを爲ざらんや、況て彼なんぢに身を洗ひて清くなれといふをや」

(列王紀下第五章十三節)

ナーマンに於て私共は神が人間を取扱ひたまふ場合に、信仰が如何なる地位を占むるかといふ著しい舊約的な例證を見ます。これは信仰といふものが實際どんなものか

といふことについて驚くべき發見をさせてくれます。先づ第一にナーマンの側にいやされたいといふ願がどんなに強かつたかといふことを考へなさい。彼はシリヤの王にもイスラエルの王にも歎願して有ゆる事を致しました。彼はまた長い旅をしたうへ、出て来て逢ふとしてくれない預言者の前に身を卑う致しました。恵みに對する欲求のこの強さ、これが強い信仰の土臺であります。そして私共の宗教に一番缺けてをるのは、神とその恵みに對するこの欲求であります。

信仰の第二のしるいは、先入主となつてゐる意見を全く棄て、神の言の前に跪くことでもあります。これはナーマンには餘りのことだと思はれましたので、彼は怒つて去りました。併しよかつた事にはかしい忠實な僕が彼によい忠告をいたしました。たゞ神の言を受入れるといふやうな、そんな簡單なことがどうして心にそれほど力ある革命を起すものかといふ考へで、信仰は屢々邪魔されます。

それから信仰の第三のしるいは、神の言に盲目的に服従することでもあります。「洗

へ、さらば清くなるべし」。初めはまるで駄目だと見えます。併し信仰は服従することによつて自らを表します。一度ならず二度ならず、七度までも力ある奇蹟がなされることを信じて従ひます。信仰はたゞ「洗へ、さらば清くなるべし」といふ簡單な言を握ります。そして御覽なさい「全く清められて」、嬰兒の肉の如くに一新せられて、能力ある業がなされたのではありませんか。

神の言が「清き水を汝等に灑ぎて汝等を清くならしめ、汝等の諸の汚穢……を除きて汝らを清むべし」(エゼキエル書三十六章二十五節)といふ約束に私共を導きます。私共は私共の邪魔をいたしますのは不信仰であります。私共は神の約束に對して全意志を傾けて、單純に、ぐらつかずに従ふことが、私共に必要な心の清めを來すのだといふことを信じやうではありませんか。「河あり、そのながれは神のみや、こをよるこばしむ」(詩篇四十六篇四節)。それは神と小羔との玉座の下から出て、數多の貴い約束の溝を通つて流れて居ります。そして一步一步「洗ひて清くなれ」といふ言が聞えて居り



ます。キリストは「言により水の洗をもて」(エペソ書五章二十六節) 清め給ひます。約束は一つ一つ「洗ひて清くなれ」洗へ、さらば清くなるべしとの召命であります。キリストはかく宣ひます。「汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり」(ヨハネ傳十五章三節)——全く清し。

### 第十一日 キリストを信する信仰

「神を信じ、また我を信ぜよ」(ヨハネ傳第十四章一節)

キリストがその弟子達と別れんとするときにあつて、お與へになつた袂別のお言(ヨハネ傳十四—十七章)のうちに、彼は神に對すると同じ全き信頼をもつて己を信すべきことを弟子達に教へられました。「神を信じ、また我を信ぜよ」。「我を信ぜよ、我は父に在ることを」。「我を信する者は我がなす業をなさん」(ヨハネ傳十四章十一—十二

節)。この地上にあつては、彼はその弟子達に御自身を全く知らしめることはお出来になりませんでした。併し天に於ては、神の能力は凡て彼のものであります。そして彼は弟子達の中に在りて、また彼らを通して彼がかつて地上に於てなし給うたよりも、もつと大なる事をなし給ふのであります。この信仰は先づ第一に父と一つであり給ふキリストの御人格の上に確く立たねばなりません。弟子達は神がかつてなし給うたことは凡て今やイエスによつても亦なされ得るといふ全き信頼を持たねばなりません。した。キリストの神性は私共の信仰がよつてもつて立つところの巖であります。人間として私共の性質を分擔したまふキリストは實に眞の神であり給ふのであります。神の能力はキリストのうちに働いて彼を死から復活へらしさへしました。そのやうにキリストもまたその神としての全能の力をもつて私共のうちに必要な凡ての事をなし給ひます。

愛するクリスチャン達よ、その神たる全能に於て父と一つであり給ふ者として、イ

エスを禮拜する時を有つといふ事がどんなに大切なことかといふ事を認めませんか。そのことは私共が望み得る凡てのことをなして下さる十分の資格あるお方として、キリストを考へるやうにあなたを教へるでせう。私共は、私共を全く救ひ、清め、力づけることの出来る、全能の救主として彼が現在し給ふといふ意識をもつて、キリストについての有ゆる思想が満ちるまで、この信仰に捕へられねばなりません。

神の子よ、この恵まれたる主イエスの前に深い卑りをもつて跪き、「わが主よ、わが神よ」と彼を拜みなさい。キリストが全能の神としてあなたのために、あなたの衷に又あなたを通して、神の望み給ふところと、あなたが要するところとを凡てなし給ふといふ、たしかめられた信仰を十分意識するに至るまで、時間をお費しなさい。あなたが知り且つ愛してゐる救主をして、未だかつてなかつたほど能力ある神となつて頂きなさい。彼をしてあなたの確信あなたの力であつて頂きなさい。

救主は正に世を去らんとして居られました。その最後の夜、袂別の訓示をなし給う

た時に、先づ最初に話された事は弟子達の全生涯を通じて、凡てのことは唯單純に彼を信するといふ事にかゝつてゐるといふことでした。それによつて彼等は彼がかつてなし給うたよりも、もつと大なる事をなすのでありました。そしてその話の終りに彼は「されど雄々しかれ、我れ既に世に勝てり」と再びくりかへし給ひました。私共には要する只一つの事は、私共の衷に働き給ふキリストの大なる能力を眞直に、しつかりと、絶えず、信することでありませう。

## 第十二日 我等の衷にあるキリストの生命

「われ活ければ汝らも活くべければなり」(ヨハネ傳第十四章十九節)

三福音書にある教へど、ヨハネのそれとの間には大きな相違があります。ヨハネはイエスの心の友でありました。彼は主を誰よりもよく理解することが出来ましたから、

他の人々が少しもかいてゐないキリストの教訓を記録いたして居ります。新約聖書の最も深い奥の院であるヨハネ傳十三章から十七章が斯くして出来たのであります。他の人々は新約の最初の大なる賜として悔改と罪の赦しとについて述べて居ります。併し新しい契約がもたらすところの新生命、即ち律法が生ける力として與へられてゐる新しい心をもつた新生命については、彼等は殆ど何もいつて居りません。處がヨハネはキリストが、彼自身の生命そのものが眞に私共のものとなり、キリストが父と一つであり給うたやうに、私共もキリストと一つになることを教へられたといふ方面を記録して居るのであります。他の福音記者はキリストのことを失はれた者を尋ねて救ふ牧羊者として語つて居りますが、然しヨハネはキリストのことを、自分の生命が彼等のものとなるやうに、羊のために生命を捨てる牧羊者だといつて居ります。「わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり」(ヨハネ傳十章十節)。

キリストは茲に「われ活くれば汝らも活くべし」と仰せられて居ります。弟子達はキリストがそのとき持つて居られた生命を受くるのでなくて、死に勝つて神の左に擧げられ給ふ力ある復活の生命を受けるのであります。彼はそのとき以來常に彼等のうちに住み給ひました。新しい天につける永遠の生命、イエス御自身の生命が彼等に充されたのであります。そしてこの約束は信仰をもつてそれを受入れる凡ての人々に對してのものであります。

あゝ併し信仰生活の初步に満足して、その完成、即ちもつと充實した生命を得度いこの望をもたぬ人々が何と多いことぞせう！ その人々はそれを信せず、イエスの生命に全く充されるために要する犠牲を備へやうとしないのであります。神の子よ、聖言は再びあなたに臨みます。曰く「これ人には能はねど神は凡ての事をなし得るなり」(マタイ傳十九章二十六節)と。私はあなたにおすゝめします。キリストの驚くべき約束をしてあなたの心を占領せしめなさい、キリストがあなたのうちに生き、あなたがキリストのうちに生きる、この完全な救以下何ものによつても満足なさいますな。

これはキリストの約束に耳を傾け、神の全能の力がその力強い恵みの奇蹟——信仰によつてキリストが心に住み給ふことを自分のうちになし給ふことを信する凡ての人々のためのものだといふことを確信なさい。

### 第十三日 愛の服従

「なんぢら若し、わが誠命をまもらば、我が愛にをらん」(ヨハネ傳第十五章十節)

屢々こういふ間に接します。一體どうすれば絶えずキリストのうちに在り得るでせうか。どうすれば全く彼のために生きるやうになるでせうか。これが私の願望であり熱い祈禱なのであります。こゝに引用した聖句のうちに主はこの間に對して「わが誠命を守れ」と、單純ではあるが、然し遠大なる答へを與へて居られます。これがキリストに居る唯一にして、たしかな恵まれた道であります。「なんぢら若し、わが誠

命を守らば我が愛にをらん我が父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。愛をもつて服従すること、それが彼の愛を享樂する唯一の道であります。

最後の夜、主がごんなに度々このことについて話されたかを注意なさい。「汝等もし我を愛せば、わが誠命を守らん」(ヨハネ傳十四章十五節)。それから二度くりかへして「わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛せん」(ヨハネ傳十四章二十一節)。「人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住處を之とともにせん」(ヨハネ傳十四章二十三節)。それから十五章にはまた三度「わが言なんぢらに居らば何にても望に隨ひて求めよ、さらば成らん」(七節)。「なんぢら若し、わが誠命をまもらば、我愛にをらん」(十節)。「我等もし我が命ずる事を行はば我が友なり」(十四節)。六度までも繰返して主は誠命を守ること、彼を愛すること及びそれにつゞいて來る大なる祝福の約束、即ち父と子が心の裏に住み給ふといふことを結びつけて居

られます。彼の誠命を守る愛が彼の愛に居る唯一の道であります。キリストと私共との関係は、キリストの私共への愛と、隣人を愛することによつて證明する私共のキリストに對する愛との関係で、即ち愛が凡てであります。

この教訓を受入れる人々が何と少いこととせう。多數の人々はそんなことは不可能だといふ考へで満足して居ります。彼等は神の恵みによつて私共が罪から守られることが出来ることを信じません。彼等は「吾靈を汝らのうちにおき、汝らをして我が法度に歩ましめ、わが律を守りて之を行はしむべし」(エゼキエル書三十六章二十七節)といふ新しい契約の約束を信じないのであります。キリストに全く降伏し、全く彼に捧げ盡した心にのみ、それ以外のことでは到底達せられないと言へること、即ち彼を愛し、その誠命を守り、彼の愛に居ることを彼が可能ならしめ給ふといふことを彼等は考へません。

キリストの生命の力として聖靈を弟子達の裏に下すといふ驚くべき約束は、弟子達

が喜んで彼を愛し、その言を守るといふことの手助けでありました。それがキリストに居ること、キリストと神とが内在して下さること及び神の祝福をその凡ての働きの上に持來すべき彼等の祈禱に對する神の答の大なる奥義なのであります。

## 第十四日 聖靈の約束

「我ゆかば之を汝らに遣はさん。彼はわが榮光を顯さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり」(ヨハネ傳第十六章七、十四節)

十字架に釘けられ給ひしキリストは天の玉座に於て榮光をお受けになるべきでありました。そしてその榮光から弟子たちの心に聖靈を降して御自身を崇めしめ給うたのであります。十字架に死し榮光を受け給ひしキリストの御靈が、弟子たちにとつては彼と交る生命であり、彼に仕へる能力でありました。聖靈は神の榮光の御靈として私

共に來たまひます。それ故に私共は彼を歓迎し、その導きに全く身を任ねるべきであります。

神の深きところをわきまへ、神の御存在の根底そのものうちに在り、キリストの御生涯を通じてその十字架の死にまでもキリストと共に在り給ひし聖靈、即ち父子の御霊が來りて弟子達のうちにやどり、彼等をして榮化せられ給ひしキリストの御現在を絶えず意識せしめ給ふのであります。彼等が愛をもつて服従する生活をなすための力であり、祈禱によりて必要な祝福を上から頂くときの教師であり指導者であり給うたのは、この恵み深い聖靈でありました。そして彼等が神の敵に打勝ち、世界の果までも福音を傳へるのは、またこの聖靈の能力によつてでありました。

悲しむべきことは今日の教會がこの神とキリストとの御霊を缺いて居ることです。そしてまた絶えずこの御霊を悲しませて居るのは教會であります。教會の働きが屢々弱く且つ効果のないのはこのためであります。それではその原因は一體何でせ

うか？

聖靈は神であります。彼は神として私共の全存在を把握する事を要求し給ひます。私共は聖霊を單に信仰生活の助けだと考へ過ぎて、心も生活も凡て全く、また絶えず聖霊の御支配の下にあらねばならないといふことを知らないのであります。私共は毎日毎時、聖霊によつて導かれなければなりません。御霊の能力によつて私共の生活は、正しくまた絶えず、イエスの愛と交りどに居るのであります。誠命を守る愛によつて、キリストの愛に居ることが出来ますのに、私共はその大なる約束をたしかに信じてゐないのです。またキリストの大能の力が私共のうちに、また私共を通して働くといふことを信する勇氣を私共は疑ひもなく持つてゐないのです。たしかに彼の祈禱の約束は（御霊なく信仰なしには——譯者註）私共の達し難いところであります。神の深きところを辨へたまふ聖靈は、主であり支配者であるキリストを啓示せんとして、私共の深きところを求めて居られます。

約束は私共の生活によつて成就せんと待つて居ります。『彼はわが榮光を顯さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり』。今日といふ今日、私共はその約束を直に、全心を傾けて信するやうにならうではありませんか。キリストはこれを眞實なものとしようとして待つて居られます。

### 第十五日 キリストに在りて

「その日には、我わが父に居り、なんぢら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん」

(ヨハネ傳第十四章廿節)

主は父にある御自身の生活について斯ういつておいでになります。『我の父に居り、父の我に居給ふことを信ぜよ』(ヨハネ傳十四章十節)と。彼と父とは別々の二つの人格ではおありにならないで、兩方相互に在り給ひました。人間として地上にあり給う

たごきでも、彼は父のうちに生き給うたのでありまして、彼がなし給うたことはみな父が彼に在つてなし給うたのであります。

この神聖なる天の生活、即ちキリスト神に在り、神キリストに居り給ふこの生活は、キリストにある私共の生活がこの地上に於てどうあらねばならないかといふ、その見本であり質であります。子が父に居るといふことは、神による生活の本質であります。そういふ風に私共は、私共がキリストに居ることを知りその信仰に常に生きねばなりません。その時に、若し私共がキリストに在るといふことを只信じて、彼の力に自分を任せますならば、父なる神がキリストのうちに働き給うたやうに、キリストが私共のうちに働き給ふといふことが分るであります。

丁度キリストが父なる神に事へ給ひ、父が彼を通して働き給うたやうに、弟子達はこの地上にあつて要するものを祈禱によつてキリストに告げ、キリストは之をなし給ふのであります。キリストに在る弟子たちの生活は、父なる神に在るキリストの生活

の反射である筈でありました。キリストが父にありて生き給ひました故に、父がキリストのうちに働き給ひました。そのやうに、弟子達がキリストに在りて生きますときに、キリストは彼等のうちに働き給ひます。

併しこれは聖霊が来たまふまでは出来ませんでした。彼等が上より能力を着せらるるまで、待たねばならなかつたのはこのためでありました。キリストがその約束なされた更に大なる業を彼等のうちになすことがお出来になるために、彼等が日々の交り祈禱によつてキリストのうちに住んだのはこのためでありました。キリストはその能力の秘れた源を父とその愛に居ることに見出し給ひましたが、教會もそれ以外のところにその力の源を見出すことは見出ないのですが、教會はそのことを一向理解して居りません。また傳道者が靈魂をキリストに導く大なる働をなすにふさはしい者となり、キリストに用ひられるものとなり得る唯一の道として、毎日毎時キリストに居ることを一つの大きな目的とすべきでありますのに、彼等の大多数は、そのことを

一向理解して居ないのであります。もし誰れか今日この教壇に失はれてゐる奥義は一體何かと尋ねますならば、これです、即ち『その日には』——聖霊があなたの心を満し給ふ日——『我わが父に居り、汝ら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん』。貴き主よ、どうぞ私共自身が残る方なく聖霊に降伏し、あなたが父に在し、父があなたを通して働き給ひましたやうに、私共もあなたにあり、あなたが私共を通して働き給ふといふこの恵まれたる奥義を知ることが出来ますために、日毎に何ものにもよさつて聖霊の教へを待望むことを教へて下さいませ。

恵み深き主よ、私共はへりくだつて熱心にお願ひ致します。どうぞあなたのために働きたいと求めて居る凡てのあなたの子供達に、聖霊に充されるまでは止まない恵みと祈禱の靈をお與へ下さいませやうに。



第十六日 キリストに居る事

「我に居れ、さらば我なんぢらに居らん」(ヨハネ傳第十五章四節)

主は御自身が父と一つであり給うたやうに私共が彼と一つになることについてヨハネ傳第十四章に教へ給ひましたが、今そのことを葡萄の樹と枝との驚くべき譬によつて、力づよく印象しやうとなさいました。そしてそれはみな、使徒たち及び福音に於ける凡ての彼の僕達に、日々彼と十分に交る生活が絶対に必要だといふことを分らせるためでありました。「我に居れ」。

一方に於て彼は御自分と父とを指し、丁度私が父に居るやうにお前達も眞實に、全く私に居りなさいと云ひ、それから葡萄の樹を指して、枝が葡萄の樹に連るやうに、ほんたうにお前達も私に居れと仰せられました。そして今も尙かういひ給ひます。

父が我に居り、私のうちに働き、そして私のうちに神が働き給ふことを、私が働きに表すやうに、また葡萄の枝が樹に連つて樹が生命と力とを枝に與へ、枝がこれを受けて果を結ぶ、丁度そのやうに、お前達は私に居り、私の能力を受けなさい。そうすれば私は私の全能の力をもつて私の業をお前達のうちに、お前達を通してなすであらう。我に居れ！と。

愛する神の子よ、あなたは度々この恵まれた聖句を冥想したことでせう。併しもしキリストがあなたに持たせたいと思召すほど、あなたのうちに働くキリストの全能の力をあなたが持ちたいと思ふならば、まだく學ぶべきことが澤山あるといふことを感じませんか。大に要することは、キリストが神に居り給うたやうに——これは天からの證です——また枝が葡萄の樹に連るやうに——これは自然界の證です——天地の法則が一つとなつて『キリストに居れ』と私共に呼びかけて居りますが、この二つの偉大なる眞理が、あなたの存在そのものを完全に支配してしまふまで、聖靈の力によ

つて主イエスに期待しつゞけることであります。『我に居る者は多くの果を結ぶ』(ヨハネ傳十五章十節)。果、もつともつと多くの果をどは、キリストが求め給ふところであり、彼が働き給ふところであり、彼を信する魂に、たしかに彼が與へ給ふものであります。

神の子供たちの最も弱い者にキリストは仰せられます。お前達は私にあるのだ、と『我に居れ、さらば多くの果を結ぶべし』。併しまた最も強い彼の使者たちにも彼は尙『我に居れ、さらば多くの果を結ぶべし』と仰せられます。さればこれ以上の高いものはあり得ないからであります。この音信は一切の人々に對して參ります。即ち日々繼續して、絶えずキリスト・イエスに居りつゞけることは、能力と恵みの唯一の條件であります。『我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満されん爲なり』(ヨハネ傳十五章十一節)との聖言の意味が、あなたに理解が出来るまでに、あなたのうちに聖靈をしてキリストに居るといふ事の奥義を、新にせしめ

なさい。

『わが愛に汝を居らせつゞけることを我なし得ると信するか?』、主よ、然り。——  
「懼るな、たゞ信ぜよ」(マルコ傳五章三十六節)。

### 第十七日 祈禱の力

「汝等もし我に居り、わが言なんぢらに居らば、何にても望に隨ひて求めよ、然らば成らん」  
(ヨハネ傳十五章七節)

主は天に昇りたまふ前に、弟子達にそのなすべき大いなる働に對し、彼等とキリストとの關係がどういふものであるか、それについて二つの大なる教訓をお與へになりました。

その一つは天に於ては彼がこの地上で持ち給うたよりも、もつとく大なる能力を

持ち給ふであらうといふことと、その能力を専ら弟子たちの言や働きを通して、人々の救のために用ひ給ふといふことでありました。

今一つのことは彼等がキリスト無しには何事も爲すことが出来ないが、然しキリストが彼等のうちに、また彼等を通して働き、かくしてその目的を遂行したまふやうにキリストに依り頼むことが出来るといふことであります。ですから彼等の第一にして最大の業は、彼等の要するものを悉く祈禱によつてキリストに持つて行くことであります。最後の教訓に於て彼は、『我に居れ、我名によりて祈れ』と七度も約束を繰返し給ひました。あなたはそれに信賴していゝのです。『望む所を求めよ、さらば成るべし』。

彼等の心に書かれたこの二つの眞理をもつて、キリストは彼等を世に遣はしたまひました。彼等は信賴をもつてその働きを爲すことが出来ました。全能の榮化せられ給ひしイエスが彼等のうちに、彼等と共に、彼等を通して、彼御自身がかつて地上に於てなし給うたよりも、もつと大なることをなさんと待ち構へて居られます。地上にある弱い孤立の弟子たちは、彼がその祈禱をきゝ給ふといふ全き信賴をもつて、祈禱に於てたえず彼を見上げました。第一にして唯一の條件は、彼の約束の能力に對する絶對の信賴でありました。彼等の生涯およびその傳道の働に於て最も大切なことは祈禱と願の靈の扶けでありました。

悲しい哉、今日ごく少數の教會しかこの事を理解し、信じては居りません。何故でせうか？ その理由は簡短で、即ち信者が日々キリストに居る生活をしてゐないために、キリストの大なる貴い約束を信する力がなくなつてゐるからであります。キリストの身體の一員として、私共の生涯と働とのために、最も大切なことは、キリストとの密接な内的の交りが日々なければならぬといふ事を學びませう。その交りは常に先づ深い信賴と絶えざる祈願とによりて起るのであります。そうしてのみ彼が私共の祈禱をきゝ、力と溢るる恵みの源として、上から能力を與へ、そして彼の分を忠實

になし給ふであらうといふことを確信して、私共は其の働を爲すことが出来ます。あなたがた主の僕たちよ、心の奥底からキリストのいはれた言をお信じなさい。キリストは『汝之を信するや』とおたづねになります。然り、主よ、われ信す。『我に居れ、わが愛に居れ』。『汝等もし我に居らば、何にても望に隨ひて求めよ、然らば成らん』。

### 第十八日 愛の神祕

『これ皆一つとならん爲なり。父よ、なんぢ我に在し、我なんぢに居ることく、彼らも我らに居らんためなり、是われらの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。即ち我かれらに居り、汝われに在し』(ヨハネ傳第十七章廿一—廿三節)

最後の夜キリストがお話しになつたこのうちで、彼は特に弟子たちが彼に在り、彼のうちに居るといふことを高調せられました。彼はまた御自分が弟子たちの中に居

るといふことについても語られましたけれども、此方は前にいつた、弟子達が彼に在るといふこと程には強く仰せられませんでした。併し彼の大祭司としての祈禱のうちに、彼は父が彼に在り給ふ如く彼が弟子達のうちにあり給ふといふことを度々くりかへされました。『是われらの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられんためなり。是なんぢの我を遣し給ひしことと、我を愛し給ふこととく彼等をも愛し給ふことを、世の知らんためなり』。

信者が彼等のうちにキリストが在したまふことをその生活で表し、キリストが彼等を愛したまふやうに彼等が隣人を愛することによつて、そのことを證明するときにのみ、神がキリストを愛し給うたやうにまた弟子達をも愛したまふことを世に認めさせる力が出て参ります。教會の弱さはこのためであります、即ちキリストに在る私共の生命および私共に在るキリストの生命が知られて居らず、且つキリストが私共のうち

に居り給ふといふことを證明するやうな、愛のある一致した生活をして、それを世に示されないためであります。

何よりも必要なことは、心にキリストが内住してくださること、その心のうちに内住して下さるキリストを有つてゐるもの同志が、お互に善く識り合ひ且つ愛し合ふことによつて、信者が一致することでありませう。祈禱の最後の言に『われ御名を彼らに知らしめたり、これ我を愛し給ひたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らんためなり』(ヨハネ傳十七章二十六節)とある通りであります。神が内住して下さるといふことの最も大なる貴さは、それが神の愛を表示するところにあります。キリストに對する神の愛が、キリストによつて私共に與へられ、更に私共から溢れ出て隣人に、また凡ての人々に及ぶのであります。

キリストは愛する従順なる弟子達に、『我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、かつ我等その許に來りて住處を之とともにせん』(ヨハネ傳十四章二十一、

二十三節)といふ偉大な約束をお與へになりました。聖靈によりて父と子とが一つであり給ひますが、その聖靈が私共の心に住むことを望みたまふのは、キリストと隣人に對するこの愛の生活を私共にさせるためであります。神の子よ、あなた方が求め、信じ、且つ全心全力を盡して要求なさらねばならぬものは『知識を越えた愛』をもつて主イエスが内住したまふといふことの外にはありません。それを以て彼はあなた方の心を満し給ふのであります。そうなつて世は眞に、神の子たちがお互に負うてゐる愛によつて『父よ、汝が我を愛し給ひたる愛の、彼らにありて、我も彼らに居らんためなり』との御言が成就されたことを認めるやうに餘儀なくされるでせう。

『我この事をなし得と信ずるか?』主よ、然り』(マタイ傳九章二十八節)。

### 第十九日 我等の義なるキリスト

「功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり」

(ロマ書第三章廿四節)

三福音書の記者は贖罪を罪の赦し又は義とせらるることとして語つて居ります。ヨハネは之をキリストが私共のうちに生きたまふ生命、或は再生として語つて居ります。ところがパウロに於ては、この両方の眞理が美しく一つに結合され、調和されて居るのを見出します。

彼はロマ書に於て、始めに義とせらるることについて語つて居ります。ロマ書第三章二十一節より第五章十一節まで。それから進んで、第五章十二節以下第八章三十九節に於て、キリストとの合一による生命について語つて居ります。ロマ書第四章に於

てはこの両方面のことをアブラハムのうちに見出し得ることを語つて居ります。先づ第一、その三―五節には「アブラハム神を信す、敬虔ならぬ者を義としたまふ神を信する者は、その信仰を義と認めらるるなり」とあり、それから十七節には「死人を活したまふ神を信す」とあります。神は先づ第一にアブラハムの信仰を義とし、それから死にし者に生命を與へたまふ神として神を信するやうにアブラハムを御導きになりました。丁度そのやうに信者をも又お導きになります。

義とされることは、いつ始めらるるか云へば、信仰の眼をキリストに固着させるとき、全く完全に始められます。併しそれはほんの發端に過ぎません。信者はそれからだん／＼と、義とさるると同時に新に生れたこと、即ちキリストを自分のうちに持つてゐること、また自分が召されたのは今やキリストのうちに住むためであり、キリストが自分のうちにあつて生き、且つ働いてくださるためであることを悟つて参ります。

大抵の基督者は義とされたといふ信仰をしつかり握ることによつて、感謝と服従の生涯を送るやうに自分を鼓舞し力づけやうと努力いたします。併し悲しいことに彼等は失敗いたします。その理由は彼等がキリストの生命を自分のうちに留めることを知らず、全き信仰をもつて自分自身をキリストに任せて了はないからであります。彼等は罪人を義としたまふ神を信するといふ第一の點をアブラハムから學びました。けれども偉大な第二の點、即ち死にし者を活して日々彼等のうちに生き、その生命に於てのみ能力と全き祝福とがあるキリストを通して、その生命を新にしたまふ神を信するといふところまで進まないのであります。基督者の生涯は「信仰より信仰へ」でなくてはなりません。赦しの恵みは、ほんの發端に過ぎません。恵みに成長することによつて、キリストに在り、キリストに生き、育ちて凡てのこと首なるキリストの如くならず、ごんなことかといふ事について、もつと十分な洞察と經驗とに導かれて参ります。

## 第二十日 我等の生命なるキリスト

「況て恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや」(ロマ書第五章十七節)

「斯のごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思ふべし」(ロマ書第六章十一節)

パウロは私共の義たるキリストを信する信仰の結果として、死から甦つた私共の生命なるキリストを信する信仰が随ひ起るべきだと教へたといふ事を前に申しました。彼は「なんぢら知らぬか、凡そキリスト・イエスに會ふバプテスマを受けたる我らは、その死に會ふバプテスマを受けしを」(ロマ書六章三節)と質問して居ります。私共は彼と共に葬られ、彼と共に死から甦らせられました。丁度アダムによつて彼の子孫

がみな死にましたやうに、キリストを信する者はみな彼にあつてまた實際死んだのであります。『われらの舊き人、キリストと共に十字架につけられ』(ロマ書六章六節)、彼と共に私共は死から甦へられたのであります。そして今や私共は實際『罪につきては死にたるもの、神につきては活きたる者』と自らを考へるべきであります(ロマ書六章十一節)。

丁度私共のうちにある新しき生命が、キリストの甦りの生命に實際あづかつて居り、これを經驗してゐるやうに、眞に私共がキリストに在りて罪に死ぬることもまた實際靈的の現實であります。聖靈の能力によつてその死と甦りとに於て私共が十字架のキリストと眞に一つだといふことが分らせられますと同時に、キリストに在りて罪が私共に對して何等の力も持たないことが分るのであります。私共は『死より甦りたるもの』として自らを神に捧げるのであります。

舊いアダムの罪人のうちに、(否キリストにありて自分も死んだのだといふことを知

らない信者のうちにすらも)生きてゐるやうに、丁度そのやうに自分がキリストに在りて死に、今キリストにありて生きてゐるといふことを知つてゐる人は、一刻の間も『罪は汝らに主となる事なきなり』(ロマ書六章十四節)といふ言を全く信賴することが出来るのであります。『己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスにありて活きたる者と思ふべし』。これがほんたうの信仰の生涯であります。私共がキリストに在り、キリストの生命が私共のうちに生きたまふことについて、主が仰せられたことが聖靈の全き力を經驗する時にのみ眞實だと思へるやうになるやうに、上述のこともその通りであります。パウロは、『キリスト・イエスに在る生命の御靈の法は、なんぢを罪と死との法より解放したればなり』(ロマ書八章二節)と申し居ります。以前には彼はそれが自分を虜にするといつて嘆いてゐたものであります。彼はまたこれにつけ加へて、『これ肉に従はず、靈に従ひて歩む我等の中に律法の義の完うせられんためなり』と申して居ります。聖靈によつて私共は神の子の榮ある



自由に入るのであります。

おゝどうぞ神が其子供達の眼を開いて、彼等が己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思ふ時に、彼等のうちにあるキリストの能力が、聖い果を結ぶ生活に對して、如何に力あるかといふことを見せて下さいますやうに。

## 第二十一日 キリストと共に十字架につけらるゝ事

つけらるゝ事

「我キリストと共に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生くるなり」(ガラテヤ書第二章廿節)

アダムによつて私共が神の生命と意思から死んで、罪と腐敗に至つたやうに、キリ

ストによつて私共は新しい靈的の死、即ち罪に死んで、神の意志と生命とに與る者とせられるのであります。これがキリストが死に給うた死でありました。そしてこれが又キリストにありて與る私共の死であります。これはパウロにとつては「我キリストと共に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」といひ得た程それほど現實でありました。キリストと共に死するといふことは、彼がもはや己に生さず、キリストが彼のうちに生きたまうた程の力をもつて居りました。彼はほんたうに舊い性質と罪に死んで、彼のうちに住み給ふ生けるキリストの能力にまで甦らせられたのであります。

パウロの内に生き給うたのは十字架につけられ給ひしキリストでありました。そして十字架がキリスト御自身にとつて意味したと同じ意味に於て、パウロをそれに與る者となし給ひました。キリストは己を空しくして僕の形をとり、己を卑くして死に至る迄も從ひ給うたのであります。この御心その儘の心が、パウロの中に働きました。

何故なら十字架に釘けられ給ひしキリストが彼の内に生きて居られましたからです。彼はほんたうに十字架に釘けられし人の如くに生きました。

十字架上のキリストの死は、彼の聖と、罪に對する勝利との最高の表示でありました。そしてキリストを受入れる信者は、十字架に釘けられ給ひし主がかち得たまうた凡ての能力と祝福とに與るものとせられます。信者が信仰によつて之を受入れることを學びますと、自分も己を捨て、世に對して十字架につけられ、世の樂しみと誇と慾と己を喜ばすことに死ぬやうになるのであります。十字架に死に給ひし主がその能力を啓示し給ひますとき、始めてその十字架の奧義が開けて、その人はキリストとの全き仲間となりて彼のなやみに合致するやうになることを經驗するのであります。かくしてその人は『十字架に釘けられ給ひしキリスト』は、『神の能力、また智慧なり』(コリント前書一章二十三、二十四節)といふ聖言の深い深い意味をしるのであります。そして『我キリストと共に十字架に釘けられたり。最早われ生けるあらず、――

十字架につけられ給ひし――キリスト我が内にありて生きるなり』と敢へていひ得る祝福を全く理解するまでに成長するのであります。

お、神の與へ給ふ信仰の力の恵みよ、これこそ日々人をして眞に罪に死に、神に就いてはキリスト・イエスに在りて生きるものと思はしめ、且つ己を神に捧げて生きるものとならしめるのであります。

## 第二十二日 信仰生活

『今われ肉體に在りて生きるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるによりて生きるなり』(ガラテヤ書第二章二十節)

私共がもしパウロに、彼がもはや生きず、キリストが彼の内に在りて生き給ふといふのはどういふ意味か、また彼がどういふ生き方をする場合に彼の役割は何であるか

と訊ねますならば、彼はこう答へます。「今われ肉體で在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるによりて生くるなり」と。彼の全生涯は毎日朝から晩まで、彼に與へられた驚くべき愛に對する絶えざる信仰でありました。信仰は彼の全存在と彼の一つ一つの行動を握り、之に透み込んだ能力でありました。こゝに誠の信仰生活の奥義がどんなものかといふ事が、簡單ではあります十分と言ひつくされて居ります。それは單に神の或約束を信ずるとか、或は何かキリストから頂く恵みを信ずるといふことではないのであります。それはその言語でいひ表はされた眞の深さと、十分な意味に於て、一刻一刻キリストがその人の生命となり、凡てとならんために、御自身を全くその魂にお與へになるといふ、幻を伴うてゐる信仰であります。絶えず呼吸することが肉體の生命を支へて行くのに缺くべからざる事であると同じやうに、靈魂は絶え間なき信仰に於てキリストに信頼し、そして我らの内に御靈の生命を維持するやう彼に依り頼む事が缺くべからざることでありました。信仰

は何に安住するかと云ひますと、その言でいひ表し得る限りの深い意味でキリストが私共のものとなり、私共の内に再び彼が生き給ふために、御自身を全くお與へになつた、その無限の愛の上に常に安住いたします。キリストは凡てのものに充ち給ふその聖なる全知の力によつて、恰も私共一人一人が彼をやごし奉つてゐる唯一の人間かと思ふほどに、眞に責任をもつて私共のうちに、また私共のために生命を維持し、全人類に對してと同様に個人個人に對しても全く完全な救主であり、共に住んでいただくお方でありました。丁度父が眞にキリストの中に生きて、父がなさるべきことを凡て彼のうちになし給ひましたやうに、キリストはほんたうに私共一人一人のうちに生き且つ働き給ひます。(巻尾にある『勝利の生活』と題する生ける證しを御覽下さい)。信仰は神の聖靈に導かれ教へられて、キリストの全知全能に對して確信をもつに至ります。そしてそれによつて終日心の奥底に、『我を愛して我がために己が身を捨て給ひし彼が我がうちに生き給ふ。彼こそ眞に我が生命、我が凡てなり』といふ生きた確

かな證しをもたらしめます。『我は我に力をあたふるキリストによりて凡ての事をなするなり』(ピリピ書四章十三節元譯)。神がキリストと私共との間の離すことの出来な合一を私共に示して下さいますやうに。それによつてキリストが現在し給ふといふ意識が、私共にとつて私共自身の存在を意識して居るほどに自然になりますやうに。

### 第二十三日 全き献身

「然り、我はわが主キリスト・イエスを知る事の優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ」  
(ピリピ書第三章八節)

イエスが最後の夜、弟子たちにお與へになつた約束を研究しますと、一つの疑問が起ります。それは、何がこの人々を天からの聖靈をもつてバプテスマさるゝといふ高い名譽を頂くにふさはしいもの、價值あるものとなしたかといふ事でありませう。その

譽は簡單であります。キリストが彼等を御召しになつたとき、彼等は凡てのものを捨て、彼に従ひました。彼らは己の生命を憎むまでも自己を拒否んで、キリストの御命令に服従いたしました。彼らはカルバリーまでも彼に従ひ、そのなやみと死の只中にあつて、その心はたゞキリストにのみすがりました。このことが、彼等をしてキリストの甦りの生命に與らせる準備となり、キリストが丁度さういふやうにして父から榮光のうちに聖靈を裕にお受けになつたやうに、この地上にあつて彼等が聖靈に充されるにふさはしいものとなつたのであります。

丁度イエス・キリストが全く神への献物となるために、凡てのものを犠牲となさねばならなかつたやうに、アブラハム、ヤコブ、ヨセフ以下十二使徒に至るまで、彼の民はみな神の導きに從ふために、凡てのものを捨て、神に聖別せられた生活をする人にならねばなりませんでした。彼等がさうなつて後、始めて神の能力が彼等によつてその目的を達することが出来たのであります。

パウロに於てもまた同じことでありました。キリストのために凡てのものを損と思ふことが彼の生涯の基調でありました。私共もし彼の廻りの能力に十分に與らうと致しますならば、やはり同様でなくてはなりません。併し教會は完全に神と彼の愛のためにのみ生きるために、私共が全く世から救ひ出されてゐるのだといふことを殆ど理解して居りません。丁度畑の中に寶物を見出した商人が、それを買ふために持つてゐる凡てのものを賣らねばならなかつたやうに。もし私共が眞に聖靈の力によつて彼と共に勝利に與らうとするならば、キリストは私共の全心・全生涯・全力を要求なさいます。「我が主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なり」天國の律法は不變であります。

弟子たちはペンテコステの準備をさせられるために數年間キリストと共に過さねばなりません。キリストは毎日私共と最も密接に一致して歩むために、また絶え間なく私共が彼のうちに居り、そうする事によつて、己のために生きず、全くキリ

ストのために生きる者らしく生活するため私共を召し給ひます。これが聖靈をゆたかに受ける唯一の道であります。

こういふ生涯が私共のために考へられてゐることを大膽に信じやうではありませんか。私共の心の熱心な願がこれ以下のもので満足いたしませんやうに。私共は満腔の愛をもつて主なる神と救主キリストとを愛さうではありませんか。私共は私共を愛して下さつたキリストによつて、勝利者以上の勝利者であるでせう。

## 第二十四日 全き聖潔

「願くは平和の神、みづから汝らを全く潔くし、汝らの靈と心と体とを全く守りて、我らの主イエス・キリストの來り給ふとき責むべき所なからしめ給はん事を。汝らを召したまふ者は眞實なれば、之を成し給ふべし」(テサロニケ前書第五章廿三、廿四節)

まあ何といふ御約束でせう！ 誰れでも、凡そ神の子たる者は皆この約束にすぎりつき、その成就を願ふだらうと豫期するでせう。併し悲しいことに不信仰はこれをごう考ふべきかを知らないのです、ほんの少数の人々だけが、これを自分の寶と思ひ、喜びとするに過ぎません。

よくお聴きなさい。それはとりもなほさず神、即ち平和の神御自身が、ひとり之を爲すを得、また爲し給ふであります。平和は神が十字架の血によりてかち得たまうた平和であり、凡て人の思ふ所に過ぎる平和であり、かつ私共の心と思ひどをキリスト・イエスにありて保つ平和であります。この平和の神御自身が私共を潔め、また私共の聖であり給ふキリストにより聖靈の潔めによつて、私共を全く潔めると約束し給ふのであります。その業をなし給ふのは神であります。そして私共が聖くなるのは、神御自身との近い個人的交りによつてであります。

この事を豫想して私共は非常な悦びにおどるべき筈ではありませんか。併しこの約束が餘りに大き過ぎるために、たゞ繰返されるのみで漠然とされて居るかの觀があります。願はくば、あなたの靈（神と交るために造られた人間の最奥の部分）と、あなたの魂（生命とその凡ての力の在り所なる）と、肉體（即ち罪がこれから入つて、死にまでもその力を表すが、然しキリストによりて救はれてゐるもの）、即ち靈と魂と肉體とが全く守られて、主イエス・キリストの來りたまふとき、責むべき所なからしめ給はんことを。

この約束が文字通り眞實であるには餘りに大き過ぎるといふ誤解がありそうなので、それを防ぐために言をつき加へてかういつてあります。「汝らを召したまふ者は眞實なれば、之を成し給ふべし」と。ほんたうに神は「我エホバ之をいふ、我キリストに在りて聖靈によりて之をなすべし」といはれました。私共が行つて、日々彼御自身と親しい交りに居ること、それが神の要求したまふ凡てであります。丁度太陽の熱が人體に照りつけて之を温めるやうに、神の聖潔の火が私共のうちに燃えて私共を聖くする

のであります。神の子よ、不信仰に用心なさい。不信仰は神を辱しめ、あなたの魂から嗣業を奪ひ去ります。『汝らを召したまふ者は眞實なれば、之をなし給ふべし』、この御言の中にかくれなさい。自分が高い聖い召命を蒙つたといふ思ひが起る一方に『汝らを召したまふ者は眞實なれば、之をなし給ふべし』といふ御言を思ひ起しなさい。眞に神はこれをなし給ふでせう。そして神は私が彼の完全なる平安と、彼のみが與へ得たまふ聖潔との覆ひの下に常に在り得るために、彼の御傍近く宿り住む恩恵をお與へ下さるでせう。お、私の魂よ、神がそれをなし給ふであらう。

「信ずる者には、凡ての事なし得らるゝなり」「われ信ず、信仰なき我を助け給へ」

(マルコ傳九章二十三、二十四節)。

### 第二十五日 神の能力の極めて大なる事

「絶えず汝らのために感謝し、わが祈のうちに汝らを憶え、我らの主イエス・キリストの神、榮光の父、なんぢらに智慧と黙示との靈を與へて、神をしらしめ、汝らの心の眼を明かにし、信ずる我らに對する能力の極めて大なる事を知らしめ給はんことを願ふ。神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦へらせ」(エペ書第一章十六―廿節)

こゝに又それに對して信仰を働かせなければならぬ偉大な聖句の一つがあります——その言は私共の信仰を大きくし強くし、また大膽にいたします。パウロは聖靈によつて印せられた人々に向つて書いて居るのであります。併し乍ら彼等のうちに働きたつたものが、如何に大なる神の能力であつたかといふことを、彼等が知り得るために、絶えず聖靈の啓發を祈る必要を感じて居りました。その能力は神がキリス

トを死から甦らせ給うたところの大能の勢威の活動と正に同じ能力の外にありませんでした。

キリストは世の罪とその呪の重みの下に木にかゝつて死に給ひました。そして彼が墓に降り給うたとき、彼は罪の重みと、外見上、彼を征服した死の権力の下にあり給うたのであります。そのキリストを墓から起して天の御座の能力と榮光とに甦らせ給ふとは何といふ神の能力の偉大な働でせう。その真に同じ能力——信する私共に對するその極めて大なる能力が、私共の生涯の毎日毎に私共のうちに働きつゝあるといふことを私共は聖靈の教へによつて知るのであります。「我は全能の神なり、我に豈なし難きことあらんや」(創世記十七章一節、十八章十四節)とアブラハムに仰せられたました主が、アブラハムのみならず、キリストになさつたそのことを、もし私共がただ彼に信頼しますならば、私共の心のうちに絶えずなしつゝあり又たしかに將來なし給ふことの實であると私共に仰せられるのであります。甦らせられ・高められ給うたキ

リストを私共の生命および能力として心に示して頂くことが出来るのは、その全能の力によつてとあります。これを信する人が何と少ない事とせう！ おゝ私共が私共のうちに働くこの勝れて大なる甦りの能力を毎日求めるものとなり得るために、聖靈を賜ふやうに神に叫び、また神に信頼しようではありませんか。

また私共は周圍に在る信者や教會中の凡ての信者のために、彼等のうちに働く神の全能なる甦りの力の驚くべき幻を見得るやうに、彼等の眼を開き給はんことを特別に祈らうではありませんか。傳道者たちがパウロのやうに、このことをその牧してゐる人々のための、絶えざる執成の題目となすに至りますやうに。若しも彼等がそのうちに住み、かつ働きたまふ力を啓示して頂くために、聖靈を絶えず祈り求めるやうになりましたならば、彼等の傳道上ごんなに大きな相違が起ることとせう。



## 第二十六日 内住のキリスト

「信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ」(エペ書第三章十四—十九節)

イスラエルをして他の國民と區別させた大なる特權は果して何であつたかと云ひますと、即ち彼等はその中に住みたまふ神を有つてゐたこと——幕屋と神殿に於て聖の聖なる神の家を有つてゐたことでありました。新約は、神がその民の心の中に内住し給ふといふ神の約束でありました。たとへばキリストが「わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛しかつ我等その許に來りて住家を之とともせん」(ヨハネ傳十四章二十一、二十三節)と仰せられた如き、これをパウロは「神は聖徒をして異邦人の中なるこの奧義の榮光の富の如何ばかりなるかを知らしめんと欲し給へり、この奧義は汝らの中に在すキリ

ストにして榮光の望なり」(コロサイ書一章二十七節)と申して居ります。またパウロが彼自身については「キリスト我が内に在りて生くるなり」といつてゐる如きであります。

福音とは即ち内住のキリストの恩典であります。が、これを信じ之を経験してゐるクリスチャンが何と少いことでせう！來りて、信仰生活のこの最大の祝福の經驗にいたる道についてのパウロの教へに耳を傾けなさい。

第一、「我は天と地とに在る諸族の名の起るところの父に跪きて願ふ」。その祝福は父から、跪いてゐる歎願者自身の上に、或はその牧してゐる人々のために降るのであります。それは度々祈つてゐるうちに見出されます。

第二、「父その榮光の富に従ひて」——何か非常に特別な聖なるもの——「御靈により力をもて汝らの内なる人をつよくし」、その結果罪と世から聖別され、神または主として、キリストに事へ、キリストを愛する生活をなし、そして「父と我と來りて住處

をこれと共にせん』との約束を伴うてゐる、彼の命令を真に守ることが出来るやうになるのであります。

第三、「信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ」。住み込むべき心を求めたまふのは、キリストの御本性であり、彼の神としての全能と愛であります。信仰が、この事が分つて跪き、この大なる祝福を神に願ひ求める時に、その祈禱がきかれてゐるといふことを信する恵みを受けるのであります。そしてその信仰によつて長い間、かわき求めてゐた驚くべき賜物、即ち信仰によりてキリストが心に住み給ふといふその賜物を受けらるのであります。

第四、「汝らをして愛に根ざし、愛を基とし」人間が経験出来る最大限度に於て「凡て神に満てるものを汝らに満しめ給はんことを」

神の子よ、聖霊がこゝに與へ給うた言によつて養はれなさい。父と子と聖霊とがあるたのうちになさんとして始め給うたことを、強い願と幼児のやうな信仰をもつて

瞑想なさい。私共が願つたり考へたりする以上に、裕かに神がなし給ふといふ信頼深い確信をかたくお持ちなさい。

キリストはあなたにかく仰せられます『なんぢらの信仰のごとく汝らに成れ』。

### 第二十七日 基督者の完成

「願くは平和の神、その悦び給ふ所を、イエス・キリストに由りて我らの衷に行ひ、御意を行はしめんために、凡ての善き事につきて汝らを全うし給はんことを」

(ヘブル書第十三章廿一節)

讀者よ、天の地よりも高きが如く、凡ての私共の思ひに勝つて高い神のお約束の一つを、又こゝで受け入れる大なる強い信仰を持つやうに、あなたの心を準備なさい。御承知のやうにヘブル書には、私共の大祭司であり新契約の仲保者たるキリストが

その貴い血を流すことによつて、私共のために成し遂げたまうた永遠の救について、驚くべき説明が記されてあります。ヘブル書記者は「平和の神」——お聞きなさいよ——「御意を行はしめんために、凡ての善き事につきて汝らを全うし給はんことを」といふ祝福をもつて、その凡ての論證と深い靈的教訓とを閉ぢて居ります。それが凡てのことを包含してゐるではありませんか。これ以上のことが私共に望めませうか。おきゝなさい——「その悦び給ふ處をあなたのうちに行ひ」であります。そしてそれはイエス・キリストによつてゞあります。

このところに偉大な思想があります。それはキリストが私共の救のために爲して下さつた凡てのことは、また神が死より彼を甦らせるためになさつた凡てのことは、ただ一つの目的をもつて居たといふことであります。ではその目的とは、キリストがもたらし給うたその永遠の救を神が私共のうちに自由に行ひたまふことが出来るやうにといふことであります。絶えず働き給ふ全能の神として、彼御自身があらゆる善き業

に於て私共を全うし給ふであります。そして若し私共がどうしてそれが出来るかといふことを知りたいと願ふならば、答へはこうです。即ちその悦び給ふ處を私共のうちに、イエス・キリストによつて彼がなし給ふことによるのであります。

キリストによる救の完成と、彼を見上げ彼に従ふために私共が召されたことについて教へられた凡てのことは、今やこゝに仕遂げられ、祝福されたる確かさに於てその完成を見出します。そして神は眞實に神に依り頼む者のためにかくの如き全責任を自ら負ひ、且つイエス・キリストを通してその眼によしとし給ふところの凡ての事を、神自らなし給ふのであります。

この思想は餘りに高過ぎ、この約束は餘りに大きすぎて私共には達することが出来ません。併し尙そこに私共の信仰を要求し刺戟するものがあります。即ち永遠の神がイエス・キリストによつて絶えず私のうちに働き給ふといふ一つの眞理をしつかり握るやうに私共を促します。私はたゞ一つのことだけすればよいのです。それは神に働

いて頂くやうに私自身を神の御手に任ねることであります。私は働によりて神の妨げをしないで、イエス・キリストによりて神御自身がその眼によしと見給ふ凡てのことを私のうちになし給ふといふことを確信して、だまつて神を崇めて居ればよいのです。『主よ、我らの信仰を増したまへ』(ルカ傳十七章五節)。

### 第二十八日 もろくの恩恵の神

『もろくの恩恵の神、すなはち永遠の榮光を受けしめんとて、キリストによりて汝らを召し給へる神は、汝らが暫く苦難をうくる後、なんぢらを全うし、堅うし、強くして、その基を定め給はん』(ペテロ書第五章十節)

御存知の通りへブル書は『平和の神、凡ての善き事につきて汝らを全うし給ふ』といふ驚くべき約束に、その全教訓を集中して居ります。茲にペテロも同じやうに、『も

ろくの恩恵の神、汝らを全うし、堅うし、強くし給ふ』と申して居ります。神御自身私共の毎日の信頼の唯一の對象であるべきであります。私共が自分の仕事や・必要や・生活や、凡ての心の願望について考へますとき、神御自身が私共の望みと信頼の唯一のめあてである筈であります。

丁度神が宇宙の中心であり、その能力の唯一の源であり、その運動を指揮したり、調節したりする唯一の指導者であり給ふ如く、神はまた彼を信する者の生涯に於て同様の地位を占め給ふ筈であります。来る朝毎に、先づ第一に起る思ひは、神が私にかくあれかしと思召す通りに、今日私をあらしめて下さるのは、やはりたゞ神のみだといふことである筈であります。

それではこの神に對する私の態度はどうかあるべきでせうか。毎日毎日先づ第一に起る思ひが、自分の絶對の無力を告白し、『平和の神凡ての善き事につきて汝らを全うし給はん』、『もろくの恩恵の神汝らを全うし、堅うし、強くし給はん』といふ、こ

した約束を神から成就して頂くために、子供のやうな服従をもつて、自分自身を、神の御手のうちに謙遜に任ねることであるべきだとは思ひませんか。

『敬虔の奥義』といふ私の小冊子をよんだ人は、毎朝神に拜謁し、神から御自身を啓示して頂き、その日一日の生活の責任をもつて頂くための時間をもつことが、如何に絶対缺くべからざることかといふことを學ばれたと思ひます。このペテロの驚くべき言と同時に、私共のなさねばならないことはこれではありますまいか。どうぞ神と私共との間にこの事がよく了解出来ますやうに。恵み深き父よ、この新しき日の生活と仕事とに臨んで、私の心はあなたによりかゝつて居ります。私の希望は『平和の神、凡ての善き事につきて汝らを全うし給はん』『もろくの恩恵の神、汝らを全うし、堅うし、強くし給はん』とのあなたの御言のうちにあります。

あなたの恩恵によつて今後この精神をもつて朝毎に目覺め、『神自ら汝を全うし給はん』との御言に謙遜に信頼して私の働につき得ますやうに。『主は我につける事を全

うし給はん』

限りなき恵みの父よ、願くばあなたの子供達の眼を開いて、御子が永遠に完成され給ひましたやうに、あなたが私共各自のうちに働いて聖徒を完成し、以つて御榮光を顯さんとして待つておいでになる、その幻を見させて下さいますやうに。

### 第二十九日 罪を犯す事なし

『汝らは知る、主の現れ給ひしは、罪を除かん爲なるを。主には罪あることなし。おほよそ主に居る者は罪を犯さず』(ヨハネ第壹書第三章五、六節)

ヨハネはキリストが最後の夜話された、『我に居れ』といふ御言をその心と生活とに深くとりいれました。彼はキリストを愛してその誠を守る事がキリストの愛に居る道であり、父と子とが内住して下さる道であると、主が六度も繰返して話されたことを

いつも覺えて居りました。そこで『キリストに居る』といふことが、彼が老年になつて書いたこの手紙のいはんとする生活の基調の一つであります（二章六、二十四、二十八節。三章六、二十四節。四章十三、十六節）。

始めの引用聖句に於て、ヨハネは私共がどうして罪を犯さないやうになるかといふことについて教へて居ります。『おほよそ主に居る者は罪を犯さず』。たとへ私共の性質のうち罪がありましたも、罪なきキリストに在ることが、實に私共を罪の力から解放し、日々神を喜ばし奉る生活をすることを得させます。主イエスについては『我つねに御意に適ふことを行ふ』（ヨハネ傳八章二十九節）と彼が父なる神について仰せられたことが記されて居ります。そこでヨハネは『愛する者よ、我らが心みづから責むる所なくば、神に向ひて懼なし。且すべて求むる所を神より受くべし、はその誠命を守りて御心にかなふ所を行へばなり』（ヨハネ第壹書三章二十一、二十二節）と、この手紙のうちに申して居ります。

罪の力から自由になりたいと熱望してゐる魂には『彼に在るものは罪を犯さず』神についていへば我彼に在り』といふ單純ながら仲々深遠な、こゝにいふ言をお與へなさい。『キリストのうち我等をたゞしめ給ふものは神なり』。私が罪なきキリストに居ることを求めますと、彼は實に聖靈の力によりて彼御自身の生命を私の中に現はして、神の眼によろこばるゝことを常になす生涯を送りうるものとなして下さいます。

愛する神の子よ、あなたは神の全能の力による信仰即ち大なる信仰、強い信仰、そして絶えさせなければ破れもせぬ信仰で、あなたの唯一の希望となるやうな生涯を送るために召されたのであります。あなたが毎日御旨をなすために凡てのよきことについて全うしたまふ平安の神に、あなた自身を任ねるときに、神は實に思ひもよらないことを、そう待望んでゐる人々のうちになし給ふことを経験するでせう。

『主に居るものは罪を犯さず』。この約束は確實であります。全能の神はキリスト・イエスによりて己の眼によしと見給ふことをあなたのうちになすことを保證して居ら

れます。この信仰をもつて彼に居りなさい。

『おほよそ主に居るものは罪を犯さず』われ汝に、もし信ぜば神の榮光を見んと言ひしにあらざや』(ヨハネ傳十一章四十節)。

### 第三十日 世にかつ事

「世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信する者にあらざや」(ヨハネ第壹書第五章五節)

キリストは己を嫌つてゐるこの世に對して強く語られました。彼の王國とこの世の國とは全然敵對して居ります。ヨハネはこの事を理解して『我らは神より出で全世界は悪しき者に屬するを我らは知る』(ヨハネ第壹書五章十九節)。「なんぢら世にも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その裏になし」(ヨハネ第壹書二章十五節) こういう言のうちにその事を凡て含めていつて居ります。

ヨハネはまた、己を喜ばす肉の慾、この世の榮えを見また求める眼の慾、或は己を崇める所有の誇といつて、世といふものゝ眞の性質と力とがどんなものかといふことを教へて居ります(ヨハネ第壹書二章十六節)。世なるものゝ之ら三つの特長は、バラダイスに於けるエバのうちにあります。エバは『樹を見れば食ふに善く目に美麗しく且智慧からんが爲に慕はしき樹』であることを見ました。肉體と眼と智識の誇によつて、世はエバを征服し、また私共を征服いたしました。

私共はキリストに在りて既に世に對しては十字架につけられてゐるのであります。然し乍らそのことを知らないクリスチャンに對して、この世は依然として今なほ恐るべき勢力をもつて居るものです。飲食の樂しみや、眼に見える榮光をもつものを愛したり、享樂したりすることや、所有の誇を構成する凡てのものゝうちに、この世の力が表れます。そして大多數のクリスチャンはこの世的精神の危険なことを全く知らないか、或はまた全然これに打かつ力がないことを感じてゐるか、そのどちらかであり

ます。

キリストは『雄々しかれ。われすてに世に勝てり』(ヨハネ傳十六章二十三節)といふとても偉大深遠な約束を私共におのこしになりました。神の子がキリストに居り、聖靈の力によつて聖なる生活をしたいと求めるなら、世にかつこの能力に全く信頼するがよろしい。『世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信ずる者にあらずや』我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生くるなり』(ガラテヤ書二章二十節)。これが日々刻々に世に勝つ秘訣であり、巧妙な誘惑に打勝つ秘訣であります。併しこの勝利者の態度を始終保つには全くイエス・キリストを信ずる信仰に充された心と生活とがなければなりません。お、皆様、信仰によつて世に勝てるといふことを、あなたの心の底から信じてゐるかどうか、落ついて省みて御らん下さい。確實な間斷なき勝利の唯一の保證として、神の大能の力とイエスの永遠の御現在とに信頼下さい。

「汝これを信するや」主よ、然り、われ信ず」。

### 第三十一日 信仰の作者及び

その完成者としてのイエス

「主よ、われ信ず、信仰なき我を助け給へ」(マルコ傳九章廿四節)

この言のうちに何といふ貴い勵ましが含まれて居りますことよ。悪鬼につかれた子供の父親が助けて頂きたいと願つたときに主は『爲し得ばと言ふや、信する者には、凡ての事なし得らるゝなり』と仰せられました。その父はキリストが自分に責任をもたせやうとなさつてゐることを感じました。もし彼が信じたら、子供が癒されることが出来たのであります。併し彼はとてもさういふ信仰は自分にないと感じました。ところが彼がキリストのお顔を見上げました時に癒してやりたいと思召し、且つ彼の信



仰を助けて、その弱い信仰の芽生えをすらも恵み深く受入れやうとなさつてゐるその愛をたしかに感じました。そこで涙ながらに『主よ、われ信ず、信仰なき我を助け給へ』と叫んだのであります。キリストはこの祈禱をきゝ給うて、その子供は癒されました。

神の驚くべき約束をきゝながら、その貴い賜物を握るには餘りに信仰が弱過ること、を屢々感ずる私共にとつて何といふ教訓でせう。御業をなすために私共の信仰を要求し給ふキリスト御自身が私共の信仰を氣にかけて下さる救主であり給ふといふ確信をこの事によつて私共は握ります。どんなに信仰が弱からうとも、又たとへ涙ながらであらうとも往きて『主よ、われ信ず、信仰なき我を助け給へ』と叫ばうではありませんか。キリストは彼に信賴する祈禱を受入れて下さるでせう。一つ實行して見ませう。たとへ私共の信仰が芥種の如きものに過ぎませんでも、キリストとの接觸によつて、最も弱い信仰が強大膽にさせられるのであります。イエス・キリストは私共の信仰

の作者であり完成者であり給ひます。

愛するクリスチャンよ、あなたが神の驚くべき約束をよんで、その成就を願ふ際に、一粒の芥種を思ひ出しなされることを私はすゝめたい。どんなに小さくとも、その芥種がもし地にまかれて工合よく成長すれば、大きな樹になります。あなたの持つてゐる小さな信仰のかくれた弱い種を、あなたが信賴してゐる約束の御言と共に取上げて、あなたの心に植えつけなさい。そしてそれを働かせてイエス・キリストと接觸させ、かつ彼に熱心に祈らしめなさい。彼は己に依り頼んで離れない・弱い・ふるえてゐる信仰をたしかに受け入れ給ふであります。全能のキリストにある弱い信仰は、やがて山をも移すことの出来る大なる信仰になるでせう。

私共はアブラハムについて、神がどんなに彼の信仰の責任をもち、彼を訓練して信仰に於て強くなり神に榮を歸するやうにならせ給うたかといふことを學びました。キリストがあなたの信仰を強くしやうと望んで居られることを、深い信賴をもつてお考

へなさい。そして度々くりかへして起る『爲し得ばと言ふか』といふ間に答へて、信頼深く『主よ、然り、われ信す』とあなたの心にはせなさい。神は讃むべきかな！私 は天の生命と契約の恵みとを裕かに與へんとして待つて居られるキリストを持つて居る許りでなく、必要な信仰をひそかに私の中に起して下さるキリストを持つて居ります。

シー・デー・トランプール博士著

### 世に勝つ生涯 (抄略)

「私共が一つの眞理を正しく理解し、かつこれが眞に私達の到達範囲にあるものだといふ信仰を起す助けとなるには、その眞理の生きた證明にこそものはありません。トランプール博士はその信仰上の失敗と意識的な過失とを、たれよりもよく知つてゐられることについて、ある談話をして居られます。私にははしむれば、キリストの経験が來ないうちは、彼は意識的には全く行きづまつて了つて居りました」。

私の靈的生活に於て、神との交りを意識する度合については大きな動搖がありました。或時は神が非常に近く、私の靈的生活がいかにも深く思はれました。併しそれは永續いたしませんでした。時々誘惑に會つて何か一寸した失敗をしたり、或は何といふことなしに下り坂のやうな工合に私の最も良い経験が失はれて了つて、自分が低い

どころに居るのを見出すのでした。

今一つは自分が陥り易い罪に對して失敗した場合に、私の生活の意識的な缺乏が起るのでした。私は祈りました。おゝほんたうに熱心に祈りました。併しいつものやうに救が参りませんでした。第三番目の缺乏は力の問題即ち他人の生活に變化を起すやうに説くことの出来る靈的の力に於てでありました。私は信者としての働きを随分いたしました。或時は個人傳道を一生懸命致しました。救主に己れを献ぐべきことを一人一人にとききました。長い間には勿論多少の効果は上りました、けれどもそれは僅かな事で、革命が起つて身をキリストに献げる人が一向起つて参りませんでした。私は人々をそうならせる筈だのと思ひました。他の人々はしてゐるのに何故私に出来ないのか。私は結果を考へるべきでないといふ月並の考で自ら慰めました。併しそれではどうも満足出来ないで、時々私の傳道が靈的に無益なものだと考へて心を痛めました。

暫くして私は或種の人々と近づきになりました。私にはその人々が傳道上特別に恵まれた人々で私が持つてゐないやうなキリストについての觀念または意識を持つてゐるやうに思はれました。そのキリストについての考へは、未だかつて私が持つたことのないやうなものでした。

この思ひが始めに浮んだとき、私はこれに反對いたしました。どうして私が持つてゐる以上のキリストについてのよい觀念を誰れが持つことが出来るものか。私はキリストに於てのみ永遠の生命があることを信じてゐるではないか。私はキリストに仕へて生きやうとし、彼に私の全生涯を献げてゐるではないか。私は絶えず彼の助けと導きを求め、私の唯一の希望は彼にあることを信じてゐるではないか。私はキリストについて考へられる限りの最高の立場に立つてゐるではないか。私はキリストの神性に關する論説を参考として（それによつて世界一流の聖書學者がキリストを神として信する各自の信仰を證明してゐる）今迄よりもつとよく彼に仕へねばならない

といふことは分つて居る。併しキリストについてもつと新しい觀念が必要なのだとはどうも自分には認められない。

こういつたことを幾度も幾度も繰返して考へて居りました。

その頃ある人の説教をきくか讀むかしましたときに、私はその人が私よりもずっと深いといふことを感じました。その人は全く私がまだ知らないと思ふやうな風にキリストをどいて居りました。私はその人が私の全く知らないキリストについて話してゐるやうに感じました。或人はイエスが現實に存在したまふといふ變らない意識、それがその人の最大の靈的財産だと思つてゐると申しました。

數ヶ月後、私はエヂンバラに於る世界宣教大會に出席致しました。ある日曜日の午後ホルトン博士が『基督者生活の源泉』について話すといふことをきゝまして、熱心に聴聞に出かけました、彼が私共の信仰生活を強めることの出来る、何かハツキリしたものを與へるだらうと期待しながら。併し乍ら彼の劈頭の言葉は、私の過ちを私

に示してくれました、そしてそのことが新しい喜びをもつて私の心をおどらせました。彼がいつたのは一寸こうした事でありました。『わが愛する友よ、基督者生活の源泉はたゞイエス・キリストであります』と。それが凡てでありましたが、それだけで十分でありました。私はまだそれをつかんで居りませんでしたけれども……。その後私がホルトン博士と話したときに、彼は熱心に單純に、『もし私共がもつと熱心な信仰をもつて、キリストにふみ込んでさへ行くならば、彼は私共のために大なることをなし得たまふでせう』と申されました。

英國を去る前に私はまだ今まで私になかつた思想——私がまだ知らなかつたキリストについての思想に出會しました。ウエールス人の牧師の『我にとりて生くるはキリスト』といふ聖句についての説教で、主題は前のごと同じく全き生命にして唯一の生命なるキリストでありました。

激變が起つたのは八月の中頃でした。私は青年宣教大會に出席して一週間の間、毎

日働かねばならなかつたのでしたが、そのことに對して私は自分がみぢめな、絶望し  
さうなほど不適當だといふことをしつて居りました。第一日の夕方、印度のオールド  
ハム監督が『生命の水』について話しました。キリストに従ふ人々をして各々他の人  
に對して絶えず流れて止めることの出来ない、活ける噴出する生命の水の源泉であら  
せたいといふのが、キリストの御目的であつたと彼は申しました。彼は東洋の一人の  
小さい土人のお婆さんのことを話しました。そのお婆さんが、キリストを證した驚く  
べき傳道談は、きいてゐる私共一同を唖入らせました。而もそのお婆さんは、キリス  
トを知つてから僅か一年にしかならなかつたのでした。

翌朝は日曜日で、私は獨り室で神に祈り、どうぞ道を示して下さいと願ひま  
した。もしまだ私のしらないもので、私に必要なキリストについての觀念があるなら  
それを私に與へて下さるやうに願ひました。そして神はその長く忍びたまふ忍耐と赦  
しと愛をもつて、願つたものを私に與へて下さいました。彼は新しいキリストを私

に與へて下さいました。キリストについての全く新しい觀念と意識とが今や私のもの  
になりました。

私は新約聖書中に度々『汝等のうちなるキリスト』『我等の生命なるキリスト』『キリ  
ストに居る』などいはれてゐることが、文字通り實際の恵まれた事實であつて、決し  
て言葉のあやではないといふことを始めて悟りました。私はいつてもキリストが私の  
救主であり給ふことをしつて居りました。併し私は彼を外側にある救主、外側から  
私のために救の業をなし、私の要する凡てのことに於て私を助け、力を與へ、つよ  
め救つて下さるお方として見上げて居りました。

併し今や私はそれよりもつと勝つたことを知りました。どうぞ／＼私はイエス・キ  
リストが實際に、文字通りに私の裏に居り給ふこと、即ち（私が彼に反抗しない限り）  
キリスト御自身が私の全生命、私の肉體・心・魂・靈、即私そのものとなり給うた  
ことを悟つたのであります。神の子イエス・キリストを私の生命そのものとして持つ

ことは、彼を助け主としてつよりも更に勝つたことではありませんまいか。

それでキリストと私とがまるで別々なやうに、私を助けて下さいとキリストにお願ひする必要がなくなつた譯で、寧ろ單純にキリストが私のうちに、私と共に、私を通して、御自身の業と御心をなさるのであります。私の身體も心も意志も精神もキリストのものであり、文字通りに私は彼の一部分となりました。『我はキリストと共に十字架につけられたり、最早われ生けるに非ず、キリスト我に在りて生くるなり』これが私にいへとキリストが要求し給ふ凡てとあります。かくして私は勝利の生涯といふものがあつて、それはイエス・キリストの生涯であり、もし彼に絶対に無條件で服従し、私の意志を彼の意志に服従せしめ、彼を私の救主であると同時に主として仰ぎ、入つて来て私を占領し、御自身をもつて私を壓服し、『神の充ちたれる迄に』御自身を私に充して頂くならば、願のまゝにそれが私の生涯となるのだといふことを知つた次第であります。

その結果はごうでしたか。この經驗は私にたゞキリストについての新しい智識を、前よりももつと興味深く、満足するやうに與へただけでしたか。もしそれだけのことであつたならば、皆様にお話するだけの價値はありません。併しそうではなくて、そのとき以來今日まで、そのことが内的にも外的にも革命的な、根本的に變化した生活を來しました。御存じの通り『人もしキリストにあるときは新たに造られたるなり』であります。

最初に話しました三つの缺陷が奇蹟的に充されました。

第一、それまでの私の生涯に於て知つてゐたのは全然異つた神との確實な交りがありました。キリストは私の靈的生活に恐るべき動搖の起ることを許し給ひませんでした。

第二に、陥り易かつた罪、いつも私をしめつけ、破滅させやうとしたそういふ罪に對して常に勝利を得ました。尤もなほキリストに占領せらるべき餘地が多くあり、そ

のことについて今迄よりも、すつと苦痛に感ずるやうになつて居ります。けれども多くの古い絶えざる病的な魂を破壊するやうな失敗はキリストによつて永久に除かれたことを信じて居ります。

第三、最後に、傳道上の靈的結果はこの地上で得られやうとは決して思はなかつた程の天の喜びを私に與へました。數人の親しい友達が、その人々は殆ど皆古い信者でしたが、キリストによつてその生活を全く改革せられ、この新しい行き方でキリストにかたく立ち、神の充ち足れるまでにキリストを受入れました。

その内の二人は母子で、息子は二十五歳の若い實業家でありました。他の一人はフイラデルフィアの大きな商店の總支配人で、今や大勢の同僚や店員達のうちにこの新しい生き方で、己を通してキリストに働いて頂いて居ります。ある一人の七十歳以上の白髪の老人は、人生の平安を見出し、自分には不可能だといつて既に久しくやめてしまつてゐた祈禱に喜びを見出しました。

生命は美しく實を結びます。そしてキリストに完全に内住して頂くために心を開いた或る一人の人を通して、他の人々の生命のためにキリストがなさんと欲し、またなし得たまふことを證明いたします。

イエス・キリストは私共の助け主である事を欲し給ひませんが、彼は私共の生命である事を欲し給ひます。彼は私共が彼のために働くことを望み給ひませんが、彼は私共がものをかくのにペンを用ふるやうに私共を使つて、私共を通して御自身の御業を彼におさせ申すことを私共に望みたまひます。

私共の生涯が單にキリストのための生涯でなくて、キリストとなるときに、私共の生涯は勝利の生涯となるでせう。何故ならばキリストは失敗したまふ筈がありませんから。併し奉仕をしない生涯は勝利の生涯であり得ないことを覚えて下さい。他を征服するのは人生の小さな部分に過ぎません。もし私共がキリスト御自身の生命と、その生命の喜びとに真に入りたいと思ふなら、奉仕に於て實を結ばねばなりません。日

常生活に於て絶えず常習的に實を結んで居らなければ、常習的に勝利することは出来ません。

かく全き生命としてキリストを受入れるには三つの条件があるやうです。——勿論これは罪を完全に告白し、罪とその力と、罪の結果とから救うて下さる救主として、キリストを個人的に受け入れた後のことでもあります。

第一は、私共自身および私共の持つてゐる凡てのものゝ主としてキリストに絶対に無條件的に服従すること。

第二は、私共の生命としてキリストが充ちて下さるこの賜物を神に求めること。

第三は、それから神が、私共の願つたことを既になして下さつたと、へして下さるだらうでなく既にして下さつたと、信すること。信仰の静かな働きが、この第三段の上へに凡てかゝつて居ります。信仰といふものは、感じや證據が全然なくとも、神を信せんと欲するものでなくてはなりません。何故なら神の言そのものは、彼の言のどんな

證據よりも、もつと安全で、よくて、たしかでありますから。

そしてキリスト御自身はどんな彼の祝福よりも勝つて居り、彼の與へたまふ能力、或は勝利、或は奉仕よりも勝つてゐることを忘れてはなりません。キリストは靈的能力を創造なさいいます。併しキリスト御自身はその能力よりも勝つておいでになります。彼は神の最善であり、神であり給ひます。そして私共はこの最善を持つことが出来るのであります。私共はもはや私共が生きず、キリストが私共のうちにありて生き給ふほど、完全に彼に服従し、また自己を放棄して彼に従ふことによつて、キリストをもつことが出来るのであります。あなたはこゝにいふ風にキリストを受入れやうとは御思ひになりませんか。

(終り)



昭和七年六月五日 印刷  
昭和七年六月十日 發行

信仰生活の奥義  
定價金四十錢

有所權版	

印 刷 者	發 行 者	經 售 者
橫 井 秀 子	名古屋市中區流川町二十番地 橫 井 憲 太 郎	東京原田聖書塾

Printed in Japan

發行所

名古屋市中區  
流川町十八番地

一粒社

電話東(4)六五五七番  
郵便名古屋九四四五番

マレー博士著 四條彌市郎譯 一粒社編輯部	神に満る生涯 (四六判洋綴ル ビ付百七十頁)	定價六十錢 (送料六錢)	同	一致の祈禱 (菊半判九ホ ルビ付百餘頁)	定價二十錢 (送料二錢)	同	聖靈と祈禱 (四六判洋綴ル ビ付八十八頁)	定價四十錢 (送料四錢)	同	執成の秘訣 近刊	同	禮拜の奧義 續刊	マレー博士著 原田美實譯	十字架の奧義 (四六判洋綴ル ビ付百十頁)	定價四十錢 (送料四錢)	同	信仰生活の奧義 (四六判洋綴ル ビ付百十餘頁)	定價四十錢 (送料四錢)	同	グアンダイク著 田中龜之助譯	詩篇の話 (四六判五號ル ビ付二五〇頁)	特價八十錢 (送料八錢)	金井爲一郎著	基督の死と人生 (四六判洋綴ル ビ付百八十頁)	定價四十五錢 (送料四錢)	ゴルドン著	神癒の福音 近刊	園田重賢譯	ドローセア・ ツルリアル	信仰の祈禱 (四六判五號ル ビ付二百三頁)	定價七十錢 (送料六錢)	シンブソン著	神癒の福音 近刊
----------------------------	------------------------------	-----------------	---	----------------------------	-----------------	---	-----------------------------	-----------------	---	-------------	---	-------------	-----------------	-----------------------------	-----------------	---	-------------------------------	-----------------	---	-------------------	----------------------------	-----------------	--------	-------------------------------	------------------	-------	-------------	-------	-----------------	-----------------------------	-----------------	--------	-------------

一粒社 町川流 區中 市原古名 番五四四九國古名 發兌

矢内原忠雄著	マルクス主義と基督教 (四六判總布裝 二百五十餘頁)	定價一圓十錢 (送料十二錢)	黒崎幸吉著	奴隸の生涯 (四六判總布裝 二百六十六頁)	定價一圓三十錢 (送料十四錢)	塚本虎二著	基督教十講 (四六判五號ル ビ付二百六頁)	定價七十錢 (送料六錢)	三谷隆正著	問題の所在 (四六判總布裝 百七十餘頁)	定價九十錢 (送料八錢)	黒崎幸吉著	ジョン・カルヴィン傳 (四六判洋綴裝 三百三十餘頁)	定價一圓四十錢 (送料十四錢)	黒崎幸吉著	カルヴィンの教會觀 (四六判洋綴裝 百二十餘頁)	定價三十五錢 (送料四錢)	畔上賢造著	たゞ上を仰ぐ (四六判總布裝 九百八十頁)	定價九十錢 (送料八錢)	原田美實著	救の完成 (四六判洋綴九 ホ百二十餘頁)	定價三十五錢 (送料四錢)	メーチェン著 角田桂嶽譯	信仰とは何ぞや (四六判總布裝 三百四十三頁)	定價一圓五十錢 (送料十四錢)	J <sup>M</sup> シヨウ著 土山喜一譯	基督教の根本思想 (四六判洋綴裝 百八十六頁)	定價六十錢 (送料六錢)
--------	----------------------------------	-------------------	-------	-----------------------------	--------------------	-------	-----------------------------	-----------------	-------	----------------------------	-----------------	-------	----------------------------------	--------------------	-------	--------------------------------	------------------	-------	-----------------------------	-----------------	-------	----------------------------	------------------	-----------------	-------------------------------	--------------------	------------------------------	-------------------------------	-----------------

一粒社 町川流 區中 市原古名 番五四四九國古名 發兌

トリー原著 土山喜一譯	ヘレイブ原著 鈴木二郎譯	サンダー・レング著 金井爲一郎譯	ヤコブ・ペーメ著 淺地昇譯	メルボーン著 西條彌市郎譯	スタン・ジョンズ著 金井爲一郎譯	マカンキー著 青木澄十郎譯	カルヴィン原著 今村好太郎譯	ショウエット著 田中龜之助譯	畔上賢造著	平松實馬著	畔上賢造著	インウード著 濱打龜次郎譯	黒崎幸吉著
聖書の權威	十字架の黙想	基督と偕なる生活	超感覺的生活	主御自身	印度途上の基督	聖靈の三重秘義	基督敎原理	日々の靈想	復活と靈魂不滅の別	變らざる愛	神の獨子の意義	寶血の能力	靈肉の意義
(四六判洋綴ル ビ付百十餘頁)	(四六判洋綴寫 眞入五十四頁)	(四六判洋綴裝 九ボ百十餘頁)	(菊半裁判洋綴 本文百餘頁)	(四六判洋綴ル ビ付八十頁)	(四六判總布裝 九ボ二百卅頁)	(四六判洋綴九 ボ百五十餘頁)	(菊判總布特裝 九ボ二百全頁)	(四六判總布裝 ルビ付四百頁)	(菊半裁判五號 活字八十八頁)	(四六判洋綴ル ビ付八十餘頁)	(菊半裁判五號 活字六十餘頁)	(菊半裁判九ボ ルビ付卅余頁)	(菊半裁判九ボ 活字三十餘頁)
定價三十五錢 (送料四錢)	定價三十錢 (送料二錢)	定價四十錢 (送料四錢)	定價二十五錢 (送料四錢)	定價三十錢 (送料二錢)	定價二十錢 (送料十錢)	定價五十錢 (送料四錢)	定價一圓十錢 (送料十四錢)	定價一圓五十錢 (送料十四錢)	定價二十錢 (送料二錢)	定價二十錢 (送料二錢)	定價二十錢 (送料二錢)	定價二十五錢 (送料二錢)	定價二十五錢 (送料二錢)
社 粒 一 <span style="float: right;">町川流 區中 市屬古名 番五四四九區古名替振</span> 兌 發													

終

